

2016年7月1日

みずほディーラーズアイ (2016年7月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 99.00 ~ 104.00

国際為替部 為替営業第二チーム 西谷 鷹

■ 先月の為替相場

6月のドル/円相場は大きく下落する展開となった。

第1週は、1日に110.70円近辺でオープン。消費増税延期に関する安倍首相の記者会見では補正予算案についての具体的な言及がなかったことが失望感に繋がり、109円近辺まで下落。2日はOPEC総会にて生産目標の上限設定について合意が得られなかったことがリスクセンチメントを悪化させ、一時108円台半ばまで下落した。さらに3日は米5月雇用統計が前月比+3.8万人増と市場予想を大幅に下回る数字に、ドル円は106円台まで急落した。第2週、6日は前週の米5月雇用統計の冴えない結果を受けたドル売りの流れを引き継ぎ、一時106円台前半まで続落。しかしその後は堅調な株式市場に支えられる形で107円台後半まで反発した。7日は107円台で推移した後、8日に発表された本邦1～3月期GDP(2次速報値)が1次速報値よりも上方修正されたことで、日銀の追加緩和期待が後退し106円台後半まで下落。週後半は英国EU離脱(BREXIT)懸念の高まりを背景に106円台後半で上値重く推移した。

第3週は、週前半こそFOMC、日銀の金融政策決定会合を控えて横ばい推移となったが、15日のFOMCで政策金利見直し(ドットチャート)が下方修正されてことを受けて105円台半ばまで下落。16日は日銀金融政策決定で事前予想通り現状維持となるも、一部で追加緩和を期待していた向きもあり、失望感からドル/円が下落するとストップロスオーダーなどを巻き込み104円台半ばまで急落。その後の黒田日銀総裁会見でも特段目新しい発言はなく、103円台半ばまで値を下げた。しかしその後海外時間に英国民投票で残留を支持する女性議員が銃殺される事件が起こると、残留票が増加するとの思惑から104円台半ばまで反発した。

第4週は、英国民投票を控え小動きとなるも、残留派優勢の見方が徐々に広がり、106円近辺まで上昇。国民投票当日も同様の動きが継続し、一時106.87円まで続伸。しかし開票結果が順次報道され始めると、事前予想よりも離脱派が勝利する地区が目立ち英ポンドの急落とともにドル/円も急落。さらに離脱派勝利が濃厚となるとドル/円は一時99円ちょうどまで下落した。

第5週は、前週の英国民投票以降、過度に高まったリスクオフ地合の巻き戻しから、一時103円台を付けるなど、緩やかに回復する流れとなっている。

■ 今月の見通し

今月のドル円相場は上値の重い展開を予想する。

先月の英国民投票の結果を受けて、マーケット全体のリスクセンチメントが悪化しており、しばらくは積極的にリスクテイクする地合に戻る可能性は想定しにくい。様々な報道で見られる通り、EUは速やかに脱退通告を示すよう英国に求めているものの、英国側からすれば正式に脱退通告をしてしまうと、「2年後にEU法の適用が強制的に停止になる」という制約を受けるため、できるだけ遅らせたいという思惑が滲む。日程的にも9月9日に新保守党党首選出、9月16日にEU首脳会議というスケジュールを踏まえれば、当面はEUと英国の溝が埋まる可能性は低く、先行き不透明な状況が続く。加えてスコットランドの独立問題や大手格付機関による英国の格下げ、欧州金融機関の格下げなどネガティブな材料が数多く燻っており、リスクセンチメントの早期改善は期待できそうにない。

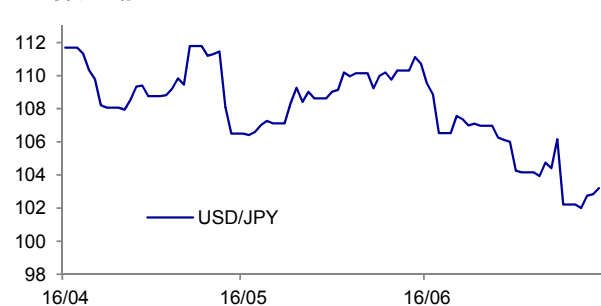
こうしたリスクを背景に米国の利上げ期待は大きく剥落しており、マーケットは足許年1回の利上げすら見込んでいない。一部にはFRBの次のアクションが利上げではなく利下げになるとの声もあり、これまでのように米国の利上げを理由にドル/円のロングポジションを構築することが難しくなっている。さらに足許の急激な円高を受けても、米政府高官からは依然として“秩序的”との文言が繰り返され、本邦当局による円売り介入は難しいとの見方が大勢を占めている。今後100円割れを再度試すタイミングで、仮にドル/円が急落する場面があったとしても、当局による動きがないとの見方が広がれば下落に歯止めがかからないリスクもある。

円安材料として、ひとつは日銀による追加緩和を挙げることができ、今月末の日銀金融政策決定会合で緩和に踏み切ると見る向きも一部ではあるものの、強力な緩和カードがない中で、すでに焼け石に水との見方も強い。もうひとつはマーケットの想定を超える大規模な補正予算が発表され、日経平均株価の上昇とともにドル/円も上昇するシナリオであるが、様々な報道がある中で具体的には固まっていな模様だ。

先月24日の英国民投票前の水準から直近安値(99.00円)を結んだ半値戻しの水準が103円近辺であり、BREXIT決定後、過度に進んだリスクオフの巻き戻しという観点では足許の水準が適当なレベルと思われる。また7月、8月にかけてマーケットが徐々に夏休みに入る時期でもあり、103円を大きく上抜ける展開は想定しにくく、下方向の動きに警戒しつつ、上値の重い展開を基本路線と見ていきたい。

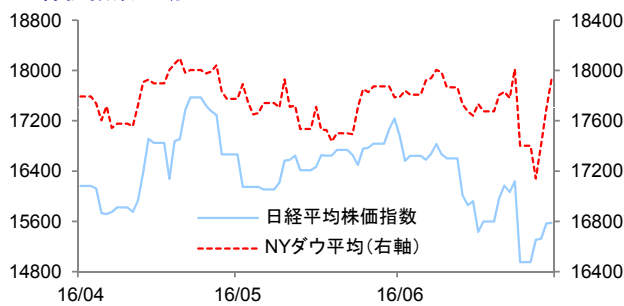
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	米ISM製造業	5月	50.3	50.7	50.8
6/3	米ISM非製造業	5月	55.3	52.9	55.7
6/3	米非農業部門雇用者数変化	5月	160K	38K	123K
6/3	米失業率	5月	4.9%	4.7%	5.0%
6/6	米イエレンFRB議長講演	-	-	-	-
6/14	米小売売上高(前月比)	5月	0.30%	0.50%	1.30%
6/14-15	FOMC政策金利発表	-	0.25-0.50%	0.25-0.50%	0.25-0.50%
6/15/16	日銀金融政策決定会合	-	-	-	-
6/28	米GDP確報値(年率/前期比)	1Q	1.0%	1.1%	0.8%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル・ブル (5名、99.00～107.00、中心100.00～106.00)

藤崎	99.00 ～ 107.00	BREXITで積み上がった投機筋の円買いポジションがアンwindされる展開を予想。旺盛な直接投資や対外証券投資、参議院選挙前に政策総動員の可能性も、戻りを試す材料となろう。
加藤	100.00 ～ 106.00	BREXITに絡んで売り建てたポジションを整理する月。市場の多くが売りを見ており、戻り売りのポイントを考えていることを考慮すれば、短期投機筋のポジションはショートに傾いていると考えるべきではないだろうか。
矢野	100.00 ～ 106.00	米雇用統計のビックアップ、日銀追加金融緩和の思惑を材料に、BREXITに伴う下落から緩やかに水準を回復するものと予想。ただ、戻り局面では輸出企業を中心にヘッジ売りが進む可能性も想定され、緩やかな上昇に留まるものと見ている。
佐藤	100.00 ～ 106.00	英国民投票の結果を受けた過度な悲観論は後退しつつあり、7月は戻りを試す局面となりそう。ただ、FRBは今回の結果が米景気に与える影響を見極めたいとの思惑が働きやすく、年内の利上げは困難とみる。加えて、夏休み入りが迫る中、ドル/円の上値も限定的か。
尾身	99.00 ～ 104.00	BREXITでつけた安値99.00円をサポートに底堅い相場推移を予想。悪化したリスクセンチメントの改善、残された年内米利上げ期待を背景に材料不足の中、一段のドル安は控えられるだろう。また、例年夏季は値幅が小さい傾向があり、今年も大きな値動きは8月後半まで控えられるか。

■ドル・ベア (6名、97.00～105.00、中心98.00～104.75)

山下	97.00 ～ 104.00	ドル安の進行で製造業を中心とした米企業マインドは上昇しており、英国EU離脱問題での不安定な状況下、7月の米利上げの可能性はゼロと言っていないだろう。仮に日銀が追加緩和に動いたとしても、一時的な上昇に過ぎず、ドル円はダウントレンド継続。
高田	98.00 ～ 105.00	BREXIT投票結果に因る衝撃は沈静化しつつあるも、市場のリスクセンチは総じて改善しておらずドル/円は上値重い展開か。今後テーマが再び米金融政策に戻ると思われるが、今秋に控える米大統領選挙も意識され、仮に良好な米経済指標が確認されたとしても反応は限定的であろう。
西島	98.00 ～ 104.50	大きく後退していた米追加利上げ気運はBREXITにより一段と萎み、年内1回の利上げすら危うい状況。BREXITがトランプ旋風を再燃させるリスクも危惧される。日銀が追加緩和に踏み切る可能性は考え得るも、もはや追加緩和が素直に株高・通貨安に繋がるか懐疑的な中、ドル円の上昇はイメージし難い。
下山	98.00 ～ 105.00	BREXITの影響を受け、米国の年内利上げ観測も大きく低下しており、ドル高期待は限定的。本邦の追加緩和観測はあるも、仮に追加緩和がなされたとしても本邦輸出企業の円転フロー等が強く上値を押さえるだろう。下目線を継続したい。
西谷	99.00 ～ 104.00	BREXITに係る不透明感、米国の利上げ期待の剥落、日銀が今月の金融政策決定会合で追加緩和に踏み切れないとの見方等から、足許ドル円を買っていく材料に乏しい。当局による円売り介入は難しいとの見方もあり、急落するリスクを警戒しつつ、上値の重い展開を基本路線に見ていきたい。
森谷	98.00 ～ 105.00	米国年内利上げ観測は大きく後退。仮に良好な米経済指標の結果が示されたとしてもBREXIT問題に不透明感が残る中では利上げ期待も高まりづらいだろう。日銀追加緩和の可能性はあるものの、円安に振れる局面では強い戻り売り意欲が見られ上値は限定的と予想。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0800 ~ 1.1300
EUR/JPY 110.00 ~ 117.50

国際為替部 為替営業第二チーム 加藤 倫義

■ 先月の為替相場

6月のユーロ相場は、対ドルでは上下に比較的大きく振幅した後、月初のレベルに回帰した一方で対円では上値が重く下落する展開であった。

1.11台前半で6月を迎えたユーロ/ドル相場は、2日のECB理事会において大方の予想通り現状の金融政策維持が決定されたものの、インフレ見通しが市場予想よりも若干弱いものであったことから軟調推移にて6月をスタートした。しかし、その後の米5月雇用統計において、予想を大幅に下回る結果を受けたドル売りに対ドルで1.13台後半まで急伸、米利上げ観測が急速に後退しリスクセンチメントは一気に悪化した。このリスクセンチメント悪化の影響はクロス円でも顕著であり、月初からユーロ/円の上値を重くすることにもなった。ユーロ/円は124円近傍で6月を迎えた後、下落の一途を辿る。第2週になるとユーロは堅調な欧州株式相場や原油価格を背景に対ドルで1.14台をつけたものの、ドラギECB総裁からの「インフレ率を目標を下回る水準に放置しない」との発言を受けた債券利回りの低下の影響と、更には英国のEU離脱(BREXIT)懸念の高まりにより1.11台へと押し戻された。

注目のBREXITを問う国民投票は、当初英調査会社より残留優勢が伝えられ、所謂リスク回避の姿勢が和らぐとユーロ/ドルは1.1429の月高値を付けたものの、実際に開票されると一部地域では予想以上に離脱派が票を伸ばしており、朝からの安心感は雲散霧消し、速報によって左右に振られるボラタイルな状況となった。ついに離脱派が優勢と見極められるとボンド売りが契機となりドル/円相場が99円を付ける状況下、ユーロ/ドルは1.0912の月最安値まで売り込まれた。この間ユーロ/円は続落の一途で、109.30円まで売り込まれた。

その後、ポジション調整からユーロ/ドルは1.12近辺まで戻すものの、週明け27日のシドニー市場でボンドが大きく売り込まれるなど、英国国民投票の余波はなかなか後退せずに積極的な取引は手控えられている状況が続いており、リスク許容度が回復して新たにポジションを構築していくというより、BREXITに備えて構築したポジションを整理していく動きが先行した最終週であった。結局ユーロ/ドルは月初と同じレベルの1.11近傍にて明確な方向感の見いだせないまま小動きが続き、四半期末を迎えている。

■ 今月の見通し

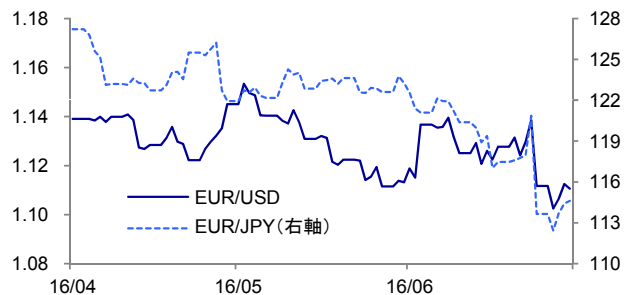
7月のユーロ相場は対ドル、対円共にユーロの下値を試す展開が続くことを予想する。

英国国民投票の結果を受けてEUの将来に対する不安、すなわちEU分裂論が顕在化してくる可能性は否定できない。もちろん、今回の英国国民投票で明らかになったのは、「英国国民の過半数が現状ではEU離脱を好感している」ということだけであり、なんら法的拘束力を持っているわけではなく、手続きに鑑みれば実現するまで最短でも2年かかる話である。足許でリーマンショックの時のようにクレジットクランチのリスクが高まっているわけでもなく、若干市場参加者の取り越し苦労のような気もする。従って市場が落ち着きを取り戻せば多少リスクセンチメントは回復するかもしれない。しかしながら、その発足時より財政面での弱点を指摘され続けてきたEUである。シンボリックに英国国民投票の結果をネガティブに受けとめた場合、やはりEU離脱論がどこからともなく噴き出す可能性は否定できないであろう。欧州共同体が発足して以来初めて経験する離脱のプロセスである。混乱するなという方が無理であろう。欧州統合を目標にしてきたヨーロッパにとって、内包されてきたリスクが初めて白日のもとに晒されたわけで、残された国々は経済的にというより政治的にその結末が試されよう。

一方で逆説的であるが、英国の状況を見るにつけ、EUがより強固に団結する可能性もあり得ると思う。離脱する英国が、残ったEU諸国から経済的に不利益を被るであろうことは想像に難くない。EU諸国がより緊密に団結することが可能であれば英国の離脱が逆にEU諸国の政治的結束を高める契機となる可能性もある。EUからの離脱が可能となることはすなわちEU側にとって彼らが膿を出すことが可能となったとも言えるわけで、それは長期的に見ればユーロにとっては決して悪いことではないだろう。ドイツやフランス、スペインといった国が離脱しない限り、相対的に小規模な国が英国に続いたとしてもEU崩壊と言えるかどうかはやはり疑問である。従って長いスパンで考えれば通貨としてのユーロが強含む可能性は依然残されていると考えられる。もっとも、足許ではそうはいかず、今月は英国を巡る混乱の余波でユーロが下値を探ることになるだろう。今月は8日発表の米6月雇用統計や21日のECB理事会、その後のドラギ総裁会見に注目である。

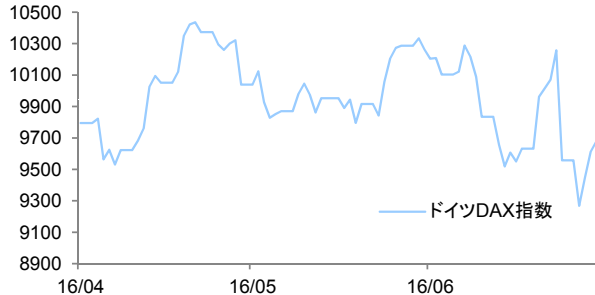
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	欧 製造業PMI	5月	51.5	51.5	51.5
6/2	欧 ECB政策金利	6月	0.0%	0.0%	0.0%
6/2	欧 ECB預金金利	6月	-0.4%	-0.40%	-0.4%
6/2	欧 ECB貸出金利	6月	0.25%	0.25%	0.25%
6/3	欧 小売売上高(前月比)	4月	0.4%	0.0%	-0.5%
6/7	欧 GDP(前年比)	1Q	1.5%	1.7%	1.5%
6/16	欧 CPI(前年比)	5月	-0.1%	-0.1%	-0.1%
6/17	欧 経常収支(季調済)	4月	-	EUR36.2BEUR27.3B	
6/21	独 ZEW景気期待指数	6月	4.8	19.2	6.4
6/24	独 IFO企業景況感指数	6月	107.4	108.7	107.7

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (2名、1.0900～1.1450、中心1.0925～1.1425)

尾身	1.0950 ～ 1.1450	BREXITの混乱を受けてユーロは対ドルで下落。今月はリスクセンチメントの改善を受けて徐々にレベルを回復すると予想。季節柄大きな反発は予想していないが、マーケットが混乱を消化するにつれて次第に1.1100-1.1300のレンジに値動きが収まっていくだろう。
西谷	1.0900 ～ 1.1400	BREXITに係る不透明感は依然として残るものの、9月まで離脱協議が進展しない可能性もあり、当面は膠着状態が続くものと思われる。足許、米国の利上げ期待が大きく剥落する中、マーケット全体的にドル買いが選好される可能性は低く、ユーロは堅調に推移するだろう。

■ ユーロ・ベア (9名、1.0500～1.1300、中心1.0700～1.1300)

藤崎	1.0500 ～ 1.1300	BREXITの先行きに対する不透明感、EU加盟国分裂のリスクを織り込みに行く形でユーロ売りが進むと予想。米利上げ観測が後退するきっかけとなった雇用統計にも注意が必要。強めの数字が出れば、ドル買い戻しに拍車がかかりそう。
加藤	1.0800 ～ 1.1300	ユーロ圏にとってBREXITは政治的に極めて大きな問題。直接的にクレジットクランチに繋がることはなかろうが、ユーロ発足以来の歴史的大事件であることに変わりはなく、その余波は少し続きそうである。
山下	1.0500 ～ 1.1300	Brexitでは英国のマイナス点ばかり指摘されているが、多額の拠出金を支払ってきた英国を失うEUサイドへの打撃はかなり大きい。ギリシャ懸念も再浮上しており、ドイツの片輪走行ではEUを支えきれない。ユーロ買い材料は乏しい。
矢野	1.0800 ～ 1.1300	BREXITを受けた下落から一旦は反発を見せるも、今後欧州圏の景気に対する懸念の高まりや、それを受けたECBによる追加金融緩和も連想されることから上値の重い展開となろう。
高田	1.0700 ～ 1.1300	BREXITを受けたマーケットの混乱は足許沈静化しつつあるものの、ECBによる追加緩和の可能性は否定しがたく、今後要人発言等で示唆されるような場面ではユーロの上値重く推移するであろう。
佐藤	1.0800 ～ 1.1300	Brexitを受け、景気先行きに対する不透明感が燃る中、経済指標も悪化することでECBの追加緩和期待が高まるだろう。ユーロを積極的に買い進める材料は乏しく、上値の重い展開を予想したい。
西島	1.0700 ～ 1.1300	BREXIT後のパニック相場は一服し、巻き戻しによりユーロ相場は戻りを試す場面がありそう。ECBが恐れていたほどの市場の混乱は起きてはいないものの、BREXIT問題が重く押し掛かる構図は変わらず、徐々にユーロ売り圧力が高まる展開を想定。
下山	1.0700 ～ 1.1300	BREXITの余波も一旦は沈静化する可能性もあるが、結局のところECBの追加緩和観測が高まることは不可避だろう。GBPの上値が押さえられることに合わせて、EURの上値も重く、徐々に下落する展開を予想している。
森谷	1.0800 ～ 1.1300	足元ではBREXIT後の荒い値動きは収まってはいるものの、Brexitが今後のEU圏に与える影響については不透明な状況。今後追加緩和観測が次第に高まると想定され、ユーロは上値を切り下げる推移を予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2600 ~ 1.3800
GBP/JPY 130.00 ~ 142.00

欧州資金部 屋田 祐太

■ 先月の為替相場

6月のポンド相場は、EU離脱決定を受け大きく下値を切り下げた。国民投票結果判明までは、行って来いの展開。6月前半までは英国のEU残留/離脱を問う国民投票に対する世論調査において離脱派が優勢となったことから、ポンドは下落。同時に離脱後のグローバルでの景気後退懸念からリスクオフ地合が支配的となり、各リスク資産への売りが膨らんだ。対円では、リスク回避としての円買いが強まったことや、日本銀行が追加緩和を見送ったことによる期待剥落で2013年4月以来、3年ぶりの水準まで下値を切り下げた。対ドルにおいても上値は重く、3日(金)に発表された米5月分雇用統計で非農業部門雇用者数が市場予想+16万人に対し実績+3.8万人と非常に弱い内容となり、利上げ観測が急速に後退した結果、対ポンドでのドル安が持ち込まれたものの、その影響は一時的かつ限定的なものにとどまった。その間、英国債金利は低下を続け、英10年債金利が過去最低水準を更新したこともポンド売りをサポートした模様。しかし、16日(木)にジョー・コックス英下院議員(労働党)銃撃、死亡事件が発生したことを契機に市場の雰囲気は一変。ジョー・コックス議員が残留支持であったことから、同情票をとりこんだ残留派が世論調査において盛り返したことで、各リスク資産は買戻しが優勢となり、ポンドも値を戻す展開となった。投票日直前までこの地合は継続、投票締め切り直後に発表されたYouGov社による世論調査の結果でも残留支持が優勢であったため、対ドルでは1.50ちょうどを回復、年初来高値を更新した。国民投票結果判明後は、売り圧力強く、ボラタイルな相場展開。23日(木)から24日(金)にかけて各投票所の結果が発表され、徐々にEU離脱が濃厚となる中、午前4時前に有権者数が多いエジンバラ地区とバーミンガム地区の発表を受け残留派敗北が決定的となった結果、ポンドは対ドルで一時的1.3228(1985年9月以来)と31年ぶりとなる水準まで下落。対ユーロ、対円でもそれぞれ0.8318(2014年3月以来)、133.25(2012年12月以来)と大きく下値を切り下げた。国民投票においてEU離脱派の勝利確定後、キャメロン首相は辞意を表明。政治的、経済的な不透明感が色濃く残る中、月末にかけては英中央銀行による早期利下げ観測が台頭。英5年債金利は過去最低水準へ低下したことで翌27日にはさらに下落幅を拡大。しかし、月末にかけては急落後の自立反発的な買いが入りやや値を持ち直した。

■ 今月の見通し

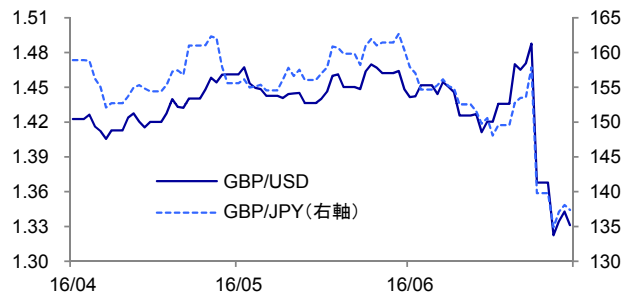
7月のポンド相場は、上値の重い展開を予想。英のEU離脱という結果に伴う不透明感の払がりは、もう一段のポンド下落余地をもたらす可能性が高い。ポイントとなるのは、①英政府とEUとの交渉の進展、②英中央銀行による政策対応、③協調介入の可能性の3点と考えられる。①に関しEUとの交渉の方向性、手順については、公式な離脱派キャンペーン団体である“VoteLeave”が国民投票前の6月15日に提示したBREXIT後の道筋に関する文書が参考になると思われる。“VoteLeave”はその文書の中で「2017年5月まででEuropean Union Lowを可決させること」や「EU条約第50条を直ちに発動させることなく、離脱に関する非公式な交渉をEU加盟国との間で行うこと」、「欧州単一市場から離脱することを明確に示し、自国の貿易ポリシーを管理できる体制とすること」などを示している。しかし、英国議会としての方針も明確でない中、現行の保守党議員が辞意を表明したキャメロン首相に代わる英国の代表としてEU加盟国と交渉することは簡単ではなく、保守党内で次期首相が指名される9月までの少なくとも3か月間は問題が棚上げされた期間が継続すると見込まれる。次に②英中央銀行の政策対応については、EU離脱に伴う企業流出や(移民減少を要因とした)労働力の減少による経済規模の縮小、先行きの景気に対する不透明感が、(離脱派が主張する通り)すぐに経済指標を悪化させる可能性は極めて小さい。そのため、英中銀は、量的緩和の拡大や利下げなどの追加緩和を行うための裏づけに乏しく、現状の緩やかな金融環境の維持以上の政策導入は難しい。さらに注意しなければならないのは、ポンド安による輸入物価上昇を要因とした国内物価の上昇が起こる可能性である。そうなった場合、英中銀は景気の悪化と物価の上昇という非常に難しい環境での舵取りを迫られることとなる。③協調介入の可能性については、24日(金)のG7財務相、中央銀行総裁声明で「為替の過度な変動や無秩序な動きは経済、金融の安定に悪影響を与えうる」との表現までに留められており、突発性の低い今回のポンド安にG7が積極的に介入する可能性は低い。今月の英経済指標などでは、8日の4月鉱工業/製造業生産、14日の5月CPI、15日の2～4月平均賃金、16日の5月小売売上高などが予定されているが、ポンド相場に一定の落ち着きが見られるまでは影響は限定的となる見込み。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の娯楽施設事情』
イギリスの娯楽施設といえばパブ(Public House/公共の家の略)。ロンドンは1ブロックに1軒あると言われるほどパブに溢れています。そして、英国人もパブに溢れています。ロンドン拠点の目の前にも「The Sea Horse」というパブがあるのですが、週末の金曜日ともなると昼過ぎくらいからお店の前に人が集まり始め、午後5時を過ぎる頃には40～50人がパブの前でおいしそうなビールを飲んでいました。そのパブでビールと一緒に楽しみたいもののひとつがスポーツ観戦です。多くのパブが大型スクリーンやテレビを設置し、有料スポーツチャンネルを放映しています。今ですとユーロ2016(UEFA欧州選手権、ヨーロッパ各国チームがヨーロッパチャンピオンを争うサッカー選手権)を見ながら、ラガーやエールで現地の人たちと盛り上がるができます。イギリスのもうひとつの娯楽施設は公園。ロンドン市内にはHyde Park、The Regent's Parkなど、大小さまざまな公園が点在しています。春から夏にかけて多くの花が咲き、木々の緑が生い茂る気持ちのいい公園へ、暗く長い冬を乗り越えた英国人は老若男女を問わず我も我もと乗り出して行きます。ロンドン市内の公園はどこも整備が行き届いていることが、公園を魅力的なものにしている理由のひとつだと思います。芝生は丁寧に刈り込まれ、ゴミがきれいに片付けられていることに加え、多くの公園(The Regent's Parkなど)で開放時間が決まっており、夜間は立ち入ることすらできません。そのため、非常に快適な空間が提供されています。イギリスには日本のカラオケやゲームセンター、ボーリングなどの娯楽施設は少なく(実はロンドンにもゲームセンターがあるのですが、15年物のダンスダンスレボリューションが現役というお粗末さです・・・)、パブや公園で業後、週末を楽しむのが習慣となっています。

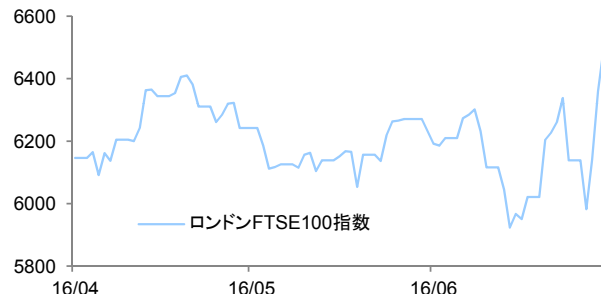
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/8	鉱工業生産 (前年比)	4月	-0.4%	1.6%	-0.2%
6/8	製造業生産 (前年比)	4月	-1.5%	0.8%	-1.9%
6/9	貿易収支 (百万ポンド)	4月	-3700	-3294	-3532
6/14	消費者物価指数 (前年比)	5月	0.4%	0.3%	0.3%
6/15	ILO失業率	2-4月	5.1%	5.0%	5.1%
6/15	週平均賃金上昇率 (前年比)	2-4月	1.7%	2.0%	2.0%
6/16	英中銀基準金利		0.50%	0.50%	0.50%
6/16	小売売上高 (含自動車/前年比)	5月	3.9%	6.0%	5.2%
6/30	GDP (前年比)	1Q F	2.0%	2.0%	2.0%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7280 ~ 0.7700
AUD/JPY 72.08 ~ 79.00

シドニー支店 山口 美紀

■ 先月の為替相場

6月の豪ドルは、上に往って来い。

1日、豪ドルは0.72台前半でスタート。3日、米5月雇用統計の非農業部門雇用者数が前月比+3万8千人と予想の同+16万人増を大幅に下回り、ドル売り・豪ドル買い進行。豪ドルは0.73台後半に上昇。7日、豪州準備銀行(RBA)理事会は、政策金利を1.75%に据え置き、更に追加緩和に関するヒントが得られなかったことから、豪ドルは0.74半ばに上昇。その後、FOMCを控え、様子見ムード強かったものの、豪ドルはじりじりと0.73台に下落。15日、FOMCメンバーによる政策金利見通しにおいて、2016年内の利上げ回数1回を見込むメンバーが増えたこと、2017/2018年の利上げペースが緩やかになったことなど多くのメンバーが利上げ見通しを下方修正し、豪ドルは0.74台前半に小幅上昇。16日、日銀が追加緩和を見送り、豪ドル/円の急落に豪ドルも連れ安となり、一時0.73割れまで急落。しかし、売りは続かず、すぐに0.73台後半に戻した。

中旬、23日の英国のEU離脱の是非を問う英国国民投票を控えて、様子見ムード強く、豪ドルは0.74台での揉み合いが続いた。23日、ブックメーカーの予想にてEU残留派がリードとの報道より、豪ドルは0.76台まで上伸。24日早朝、投票を済ませた5000人を対象としたユーカブ調査にて、EU残留派がリードとの報道より、豪ドルは高値0.7650を付けた。その後、残留派と離脱派が拮抗する中、豪ドルは下落。正午頃、離脱派優勢との報道により、豪ドルは一時0.7305まで急落。その後、EU離脱派が勝利し、金融市場のボラティルな値動きが続く中、豪ドルは0.73~0.75台での上下で推移し、結局0.74台で越月。

■ 今月の見通し

世界中が注目した英国の国民投票は僅差でEU離脱(Brexit)となった。投票の直前・直後ではEU残留を織り込んだ値動きも見られただけに、市場に激震が走った。今後の相場動向次第では、中央銀行による流動性供給、強調的な為替介入や金融緩和の動きも考えられ、ボラティルな相場に注意が必要。

かかる状況下、まず、5日(火)のRBA理事会での追加緩和及び声明文での追加緩和示唆の有無に注目が集まる。RBAは、5月にややサプライズとなる利下げを行い、政策金利を史上最低の1.75%とした。利下げの理由は「予想以上の低インフレ」と述べており、今回のRBA理事会はBrexitという激震後の会合ではあるものの、利下げ効果の波及や7月27日(水)発表予定の豪4~6月期消費者物価指数(CPI)の結果を見てから、追加緩和の有無を決定すると考えている。特に、RBAが政策運営で注視する基調インフレ率(トリム平均値+加重中央値)÷2)がRBAのインフレターゲットレンジ(+2~3%)を下回るかどうか注目される。下回った場合、8月のRBA理事会での利下げの可能性もある。現状、豪短期金利先物市場では、7月:12%、8月:54%の利下げが織り込まれている。

次に、26~27日のFOMCに注目が集まる。6月FOMCでは、イエレンFRB議長は会見にて、「英国のEU離脱懸念を背景に利上げを見送った」と述べた。EU離脱が現実化し、米国経済情勢に加えて世界経済情勢にも注視しているFRBにとって、利上げは益々厳しくなっていると思われる。7月のFOMCは、イエレン議長の会見もFOMCメンバーによる経済・政策金利見通しの発表も無く、声明文のみの発表となるが、FRBの今後の金融政策の方針を探る上で、重要な手掛かりとなろう。現状、米短期金利先物市場では、9月:0%、12月:9%の利上げ、むしろ、9月:6%の利下げが織り込まれている。

7月RBA理事会での追加緩和見送りを予想し、豪ドルは買い戻されやすいだろう。一方、米国のFRBの利上げスタンス後退より、ドルは売られやすい。豪ドルはやや底堅く推移するのではないかと。ただし、先月のBrexitを背景としたドル資金流動性の枯渇や、欧州金融機関の格下げ等をきっかけとしたシステミックリスクも懸っていることには留意が必要。その時は、リスク回避の豪ドル急落の可能性となろう。

7月の豪州注目指標は、5月貿易収支、5月小売売上高、RBA理事会(5日)、6月雇用統計(14日)、RBA議事録(19日、7月開催分)、4~6月期CPI(27日)。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

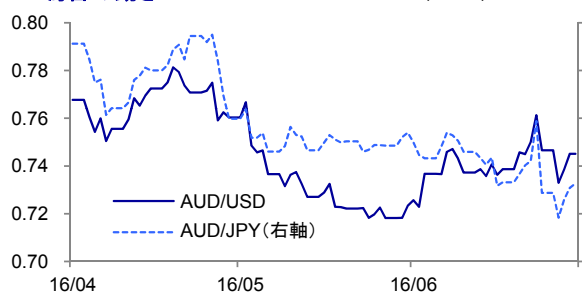
『当地の娯楽施設事情』

豪州の娯楽施設は、日本同様、遊園地、カラオケ、ボーリング、それに加えて、パブ、ビーチ、カジノだと思います。シドニーとメルボルンにはユニークなキャラクターの口がゲートになったルナパークがあります。規模は日本の遊園地と比較すると小さいですが、シドニーもメルボルンも遊園地からシティの高層ビル群等を見る事ができ、特に夕暮れや夜には最高の景色が目の前に広がります(入場料無料！)。カラオケ、ボーリングもメジャーです。先日、社内のソーシャルクラブイベントでも利用しました。そこでは、仮装してボーリングをしている者もいれば、カラオケでシャウト、他人の曲を横取り、数曲連続入れ、何でもアリ状態。

ここから、豪州独特の娯楽施設を紹介します。まず、パブ(豪州ではHotelと呼ばれます)。イギリス植民地の影響を受け、エール・タイプのビールが主流でしたが、現在は日本と同じラガー・タイプのビールが主流です。しかし、昔ながらの製法で作られるエールやスタウトなどの根強いファンも多いため、日本に比べると種類が多いと思います。また、パブではお酒とDJミュージックを堪能。基本的には立ち飲みで、会話やダンスをしながら、ひたすら飲みます。次に、ビーチ。ビーチの数に対して人口が少ないため、ビーチの混雑度や汚染度も低く、美しいビーチを独り占めできる可能性も高いです。夏の月曜日、ディーリングルームのメンバーはtanを超えburnで出社します。ビーチで「何もせずにゆっくり過ごす」、これが豪州流の娯楽なようです。最後に、カジノ。豪州主要都市にはカジノがあります。カジノ収益の一部は地域社会に還元・分配される仕組みになっており、日本の宝くじ事業と似ています。あ、6日からサマージャンが発売です！

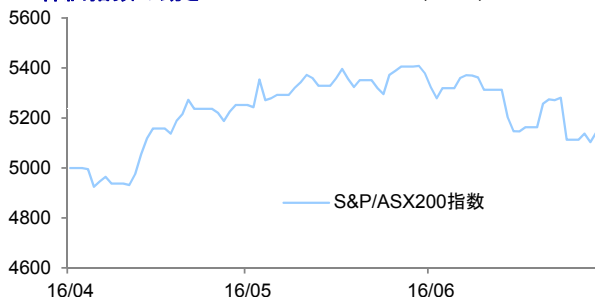
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	GDP[前期比/前年比]	1-3月	0.8%/2.8%	1.1%/3.1%	0.7%/2.9%
6/2	貿易収支	4月	▲2100M	▲1579M	▲1971M
6/2	小売売上高[前月比]	4月	0.3%	0.2%	0.4%
6/7	RBAキャシュレート		1.75%	1.75%	1.75%
6/8	住宅ローン[前月比]	4月	2.5%	1.7%	▲0.7%
6/16	雇用者数	5月	15.0千人	17.9千人	0.8千人
6/16	失業率	5月	5.7%	5.7%	5.7%
6/21	RBA議事録				
6/23	英国のEU離脱				

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2640 ~ 1.3020
CAD/JPY 78.80 ~ 82.25

米州資金部 高橋 勝彦

■ 先月の為替相場

月初、ドル/カナダドルは1.31台を試す動きとなる中、発表された米5月雇用統計の非農業部門雇用統計者変化数が予想を大幅に下回ったことから、米追加利上げ観測が大きく後退しドル売が優勢となり1.29台まで下落した。その後も堅調な原油相場を背景にカナダドルは買い進まれ1.26台半ばまで下落した。10日、発表されたカナダ5月雇用統計で失業率は6.9%まで低下し、ドル/カナダドルは1.27台半ばから1.2691まで下落した場面も見られたものの、1.26台ではドル買い意欲は強くすぐに買い戻された。月中盤にかけては、英国民投票が意識されリスク回避ムードが先行し、株式市場、商品相場の下落と共に、ドル/カナダドルは再び1.31付近まで上昇した。しかしこの水準では売り圧力も強く、また、ブックメーカーや英世論調査が多数残留優勢と伝えたことから1.27台まで下落した。多くの市場参加者の予想に反し、最終的に51.8%対48.2%で離脱派が勝利するとリスク回避の動きにドル/カナダは急進。米国債、円、金などの安全資産に買いが集中する中、商品市場、エマージング通貨の下落と共に再び1.3120まで上昇。しかしここ数週間そうであったように、1.31台ではドル売り意欲も強く、積極的に上値を探る展開とはならなかった。月末にかけては、Brexitの影響は主に政治的で、経済、金融市場へのインパクトは当初想定した程ではないかもしれないとの一部見方もあり、リスクセンチメントの改善を受けドル/カナダは下落。また、前代未聞の離脱プロセスへの不透明感、期間の長さなどの課題が山積みでもあることから市場の興味も削がれ、英FTSE100がBrexit以前に回復すると1.29台半ば付近まで下値を切り下げた。最終日に発表されたカナダ4月GDP前月比+0.1%と前回のマイナス成長からプラスに転じたが、市場の影響は限定的。その後軟調な原油価格(WTI)を受け1.3010まで上昇するが、期末のドル売りカナダドル買いブローもあることから上値の重い推移に。午後にはメキシコ中央銀行が政策金利であるオーバーナイト・レートを50bp利上げすると、同じ資源国通貨であるドル/メキシコペソが大幅下落したことから、ドル/カナダも連れ安となり、1.2915まで下落し、1.2927レベルで月越した。

■ 今月の見通し

英EU離脱により、経済的影響はもちろんだが、欧州に政治不安が高まることも警戒されていることから、リスク回避姿勢が強まり、短期的にはリスク資産から安全資産などへの資金移動が続いた。ただし、英EU離脱はリーマンショック時のように金融市場の中で生じた不均衡ではなく、今回は政治的な意味合いが大きく、金融システム崩壊を引き起こしそうな事案ではないことから、冷静に評価することが求められ、ユーロ圏の景気悪化がどの程度カナダドルに波及するかを注目したい。正規の離脱申請はキャメロン首相退任の10月ごろまで待たされる雰囲気もある。

また、離脱派のリーダーであったボリス・ジョンソン前ロンドン市長が不出馬を表明したことから、党首選の行方も気がかりだ。後任者しだいでは英EU離脱の際の交渉や条件などが変わってくるという不透明さもある。

30日に行われたブラッド・セントルイス連銀総裁の講演では“Brexitの影響は限定的”などとタカ派な発言があったが、前回のFOMC会合ではイエレンFRB議長が英国民投票を利上げを控えた要因のひとつとしてあげている。実際、離脱派が勝利したため次回の会合の声明文における景気認識に影響が出るか注目されるだろう。しかしBrexitの不透明性などを背景に来月の会合までに発表される経済指標の結果が良好であっても利上げに踏み切る確率は非常に低いだろう。

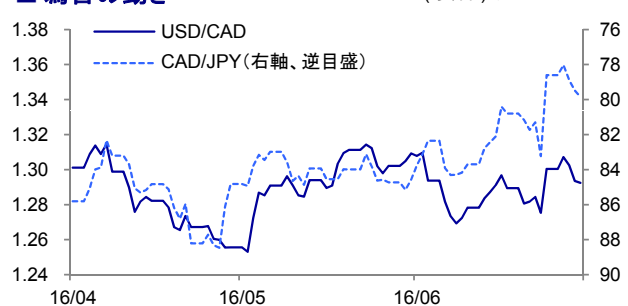
経済指標は米国は6月非農業部門雇用統計、カナダは6月失業率、消費者物価指数(CPI)などが注目される。Brexitリスクが後退し、リスクセンチメントが改善されている中、FOMC利上げ見送り、日銀追加緩和などの観測が高まれば投資家がリスクテイクを誘いカナダドル高のシナリオは十分考えられる。引き続き商品相場の急な下落には注意していきたいが、当面はカナダドル高の推移を想定しており、たとえドル/カナダが上昇しても1.31台を上抜けるのは難しそうだ。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当社の娯楽施設事情』
トロントで一番有名なテーマパークといえば、Wonderlandでしょう。ダウントウンからバス一本で行けます。モンスター級のジェットコースターが主な売りで、リバイアソンとベヘモスという名前から迫力を感じます。乗り物とは別に、Wonderlandといえば名物のFunnelCakeというデザートがあります。生地をひも状に揚げて、砂糖をまぶし、ジャム・シロップをかけるという心臓麻痺まっしぐらのものです。長生きしたいのであれば、3人くらいで分けることをお勧めします。ちなみにWonderlandは6月から10月まで開園していますが、7・8月は夏休みの家族が尋常でないくらい多く、ジェットコースターに乗るのに1時間以上待たされるため、少し寒いですが、9月または10月に行くことをお勧めします。それと、その場で買うチケット価格は60ドルですが、事前にオンライン予約すれば20ドル節約できます。正直言うと、これは今知ったのでちょっとショックです。Wonderlandよりも安くダウントウンに近い、Canadian National Exhibition (CNE) というテーマパークもあります。乗り物はジェットコースターほどの迫力はありませんが、十分に楽しめます。ただ、一つはずれがあるので気をつけてください。正確には思い出せませんが、感覚的には巨大コーヒークップを高速に回すような乗り物です。今思い出ただけでも吐き気がします。CNEは乗り物意外にも見るものが色々あり、コンサートやカジノ、ショッピングエリアもあります。僕はボーカーが好きなので、今度CNE主催のボーカートーナメントに参加してみようと思います。賞金が\$160,000なので勝てる気がしますが…。あと他に考えられる娯楽施設は、Royal Ontario Museum (ROM)とArt Gallery of Ontarioでしょうか。ROMは普段はただの博物館ですが、時々夜にクラブとしてオープンするので行ってみると面白いですよ。(カナダ支店 森 泰然)

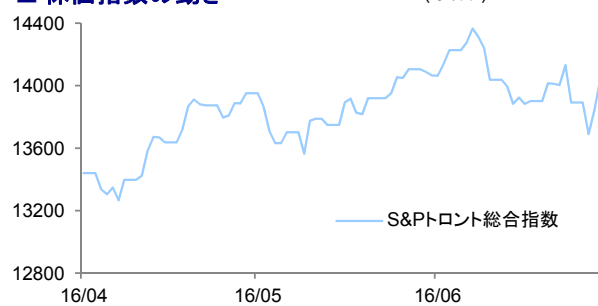
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	RBCカナダ製造業PMI	5月		52.1	52.2
6/10	雇用ネット変化率	5月	1.8k	13.8k	-2.1k
6/10	失業率	5月	7.2%	6.9%	7.1%
6/17	消費者物価指数(前年比)	5月	1.6%	1.5%	1.7%
6/22	小売売上高(前月比)	4月	0.8%	0.9%	0.8% r
6/22	小売売上高(除自動車/前月比)	4月	0.7%	1.3%	0.1% r
6/30	GDP(前月比)	4月	0.1%	0.1%	-0.2%
6/30	GDP(前年比)	4月	1.4%	1.5%	1.1% r

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1130	~	1230
KRW/JPY	8.79	~	9.20
JPY/KRW	10.80	~	11.80

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 吉田 史門

■ 先月の為替相場

6月のドル/ウォン相場は、下落。

軟調な米経済指標を受けて、月初のドル/ウォン相場は下落。月初1日のドル/ウォン相場は、前月対比-0.7ウォンの1190.0ウォンで取引を開始した後、月高値となる1195.6ウォンをつけた。ただ、当局によるドル売り介入への警戒感に加え、米5月雇用統計が控えていたことから、その後は上値の重い相場に。3日に発表された米5月雇用統計が市場予想を大幅に下回る結果となったことで、翌6日のドル/ウォンは1160ウォン台に急落。堅調な中国5月貿易収支などもドル/ウォンの重しとなり、その後も上値の重い相場が継続。

各国の金融政策に注目の集まった月央のドル/ウォン相場は、上昇。9日の金融通貨委員会でBOKが市場予想に反し、政策金利を過去最低となる1.25%に25bp引き下げることと決定。12か月ぶりとなる利下げの決定を受けて、ドル/ウォンは次第に上昇傾向に転じた。16日のFOMCは政策金利の据え置きが決まり、全体的にハト派的な結果として受け止められた。また、17日の日銀金融政策決定会合では金融政策の据え置きが決定と同時にドル/円が急落。ただ、いずれもドル/ウォンへの影響は限定的であり、焦点はBREXIT(英国のEU離脱)を問う国民投票に向けられた。

月末のドル/ウォン相場は往って来い。BREXITの世論調査において残留派が優勢となり、リスク回避姿勢が和らいだことから、ドル/ウォンは上値の重い展開となり、開票が始まった24日の寄り付き直後にドル/ウォンは月安値となる1147.1ウォンをつけた。しかし、開票が進むに連れて予想外に離脱派が勝利する見通しとなったことで、アジア通貨は売り優勢の展開に転じた。ドル/ウォンも急伸し、前日対比で+29.7ウォン上昇した。その後も、BREXITの先行き不透明感が強く意識されるも、懸念が幾分か緩和されたことに加え、月末の実需のウォン買いを受けてドル/ウォンは下落。結局、ドル/ウォン相場は前月末対比-39.9ウォンの1151.8ウォンでクローズ。

■ 今月の見通し

米利上げ期待は大きく後退したが、BREXITの先行き不透明感は強く意識されていることから、7月のドル/ウォン相場は、ウォン高方向には進みづらく、底堅い相場展開が予想される。

6月は軟調な米5月雇用統計の結果を受けて、米利上げ期待は大きく後退した。非農業部門雇用者数は前月比+3.8万人と市場予想(同+16万人)を大幅に下回ったことでグローバルにドル安が進んだ。また、15日のFOMCでは、年内1回の利上げ支持派が1人から6人に増加したこともドルの重しとなり、先月までのドル高要因は大きく後退したと考えられる。

しかし、マーケットの焦点はBREXITの先行き不透明感に向けられている。事前予想に反し、離脱派の支持率が52%と残留派の48%を上回る結果となった。これを受けて英国のEU離脱は確定したが、離脱に向けた具体的な道のりはまだ定まっておらず、不明な点が多い。かかる中、欧州の政治・経済を巡る先行き不透明感が長期に渡り続くことが予想され、ドル/ウォンの下支え要因になるだろう。

また、追加金融緩和に対するBOKのスタンスにも注目したい。6月に利下げが行われたのはサプライズではあったが、利下げ自体はある程度織り込まれていた。韓国政府は28日に20兆ウォンの財政刺激策を発表しているが、景気に明確な反発が見られない場合は、BOKによる追加利下げの可能性は十分にあるだろう。

なお、引き続き、北朝鮮との地政学的リスクにも注意しなければならない。基本的に過剰なシナリオは想定していないものの、事態の沈静化に時間がかかっていることから、同国の動向は無視できないだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

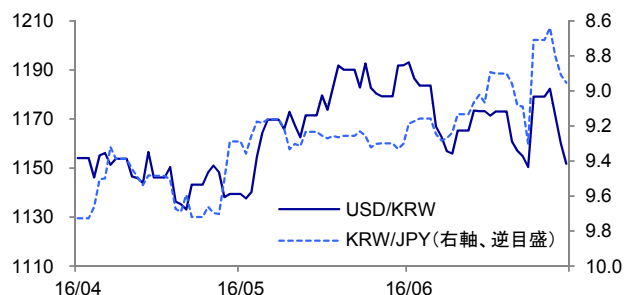
『当地の娯楽施設事情』

ソウルの遊園地といえば、「エバーランド」「ロッテワールド」「ソウルランド」などが挙げられますが、私が一番よく息子を連れて行くのはロッテワールド。ロッテワールドは少し珍しいドーム型のアミューズメントパークで、子連れに大人気です。天気を気にすることなく遊べるのでオススメです。

また、娯楽施設ではないが、韓国では登山(ハイキング)が人気です。ソウル近郊に気軽に登れる山がいくつかあり、週末は登山に行く人も多いです。一般的に親しまれており、当行ソウル支店も、登山を趣味としている人が大勢います。

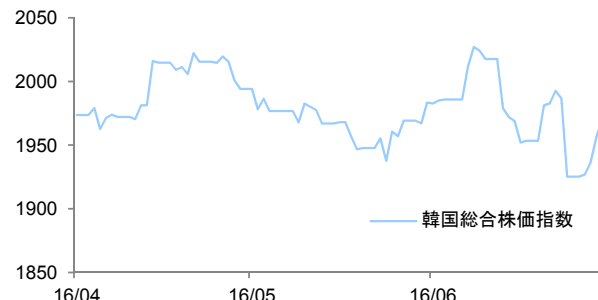
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	消費者物価指数(前年比)	5月	0.9%	0.8%	1.0%
6/1	CPIコア(前年比)	5月	1.6%	1.6%	1.8%
6/1	輸出(前年比)	5月	-0.4%	-6.0%	-11.2%
6/1	輸入(前年比)	5月	-9.7%	-9.3%	-14.9%
6/2	GDP(前年比)	1Q F	2.7%	2.8%	2.7%
6/9	韓国銀行7日間レポレート	6月	1.5%	1.3%	1.5%
6/15	失業率(季調済)	5月	3.8%	3.7%	3.7%
6/30	鉱工業生産(前年比)	5月	0.3%	2.5%	-2.8%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 32.00 ~ 33.00
TWD/JPY 3.01 ~ 3.24

台北資金室 辻野 順治

■ 先月の為替相場

6月のドル/台湾ドル相場は、弱い米5月雇用統計を機に、早期米利上げ観測が後退し、台湾ドル高が進行。英EU離脱決定により一旦、台湾ドル安に転じたが、市場心理が持ち直す中、台湾ドルが買い戻され、結果的には前月末比、台湾ドル高となった。

6月のドル/台湾ドル相場は、32.60前半でオープン。米5月雇用統計発表を控え、1～3日は、32.60付近で一進一退。4日土曜日は、振替営業日となったが、前日発表の米5月雇用統計が市場予想を大幅に下回ったことで、オープン直後には32.20台まで台湾ドル高が進行。その後は落ち着くも、32.40台での取引となった。7日は、前日のイエレン議長講演の内容が利上げスタンス後退と受け止められ、米ドル安となったことや、台湾株式市場での外国人投資家の買い越しが膨らんだことで、32.30台前半へ台湾ドル高が進行。8日も、外国人投資家の台湾株式買い越しが膨らみ、32.20付近へ台湾ドル高が継続。9,10日は祝日により休場。

13日は、10日の韓国中銀の政策金利引き下げや、世論調査を受けた英EU離脱懸念の高まりによる米ドル上昇により、32.40台まで台湾ドル安が進行。15日は、英EU離脱懸念から一段の米ドル上昇となったことで、一時、32.50付近まで台湾ドル安が進んだが、15日のFOMC、16日の日銀会合などを受け、米ドル下落や急な円高により、32.30台まで反発。

20日以降は、英国民投票の世論調査にて残留の見通しが強まったことから、米ドル軟調、アジア通貨高という展開となり、20日に32.25付近、22日に32.20台前半、23日には32.10台後半へと台湾ドル高が進行。但し、24日、英国民投票の開票が進むにつれ、英EU離脱が優勢となり、32.40台まで台湾ドル安が進行。27日も、韓国ウォン、人民元とともに、軟調に推移し、32.50台での取引となった。但し、28日以降は、市場心理が持ち直す中、28日には32.40台、29日には32.30台、30日には32.20台後半へと台湾ドルの反発が続いた。

■ 今月の見通し

7月のドル/台湾ドル相場は、台湾ドル安を見込む。

台湾経済統計は、輸出受注は冴えないものの、市場予想を上回る結果となり、前月比ではプラスを記録した。鉱工業生産も、半導体産業の動きにより、市場予想に反して、前年比プラスとなった。秋以降の電機製品の商戦に向けて、一步、動き出したところであるが、英EU離脱を受けた金融市場の混乱などがどのように波及してくるのか不透明であり、未だ楽観視出来ない状況。

英国民投票前後の動きを韓国ウォンや人民元と合わせて見ると、変動率は異なるものの、強い連動が確認出来る。台湾ドルが1%動くと、同じ方向に韓国ウォンは約3%、人民元は1%弱の動きとなっており、東アジア通貨という括りの中での変動であり、台湾ドル特有の動きは起きていないと見る。引き続き、英EU離脱の今後の動向に不透明感が残る中、金融市場の不安定な状況が続く場合、台湾ドルも軟調な推移を見込む。

もちろん、アメリカの金融政策の方向性が利上げから利下げに切り替わる場合、米ドル安、台湾ドル高という展開が見込まれるが、リーマンショック期を振り返ると、リーマン破綻後、約6か月間は台湾ドル安が一方的に続いたこともあり、市場が冷静に米金融政策の転換を米ドル相場に織り込むには、少し時間がかかるだろう。

また、6月30日に開催された台湾中銀の定例会合では、事前予想通りの利下げが行われた。結果、残り1回の利下げで、政策金利はリーマンショック後の最低水準に達する見込みだが、中銀発表資料では、利下げ打ち止め後の非伝統的金融政策への言及はなく、むしろ、経済成長のためには財政政策を行うべきとの提言がなされた。至極真つ当な意見であり、非伝統的金融政策は緊急事態の切り札として温存しておくべきだろう。一方で、今回利下げについては、一部、利下げ幅拡大期待もあったことから、今回の中銀会合を受けて、金融緩和への期待感後退に繋がる恐れもある。英EU離脱問題が小康状態となり、米ドル安が進む場合は、素直に台湾ドル高が進んでしまう局面には注意が必要だろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

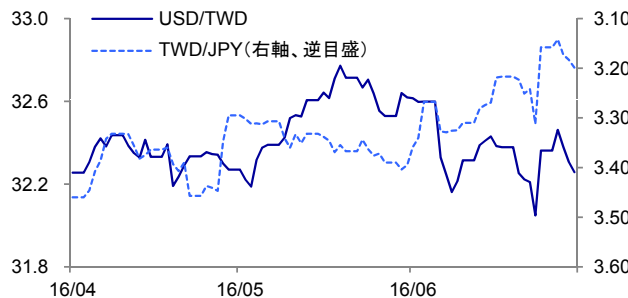
『当地の娯楽施設事情』

日本で一般的に馴染みがある娯楽施設は、台北付近であれば、美術館、博物館、映画館、ゴルフ練習場、バッティングセンター、ボーリング場、遊園地、カラオケBOX(日本語メインの店あり。)、ゲームセンター、動物園、遊園地、プール、、、など、一通り揃っているという印象です。ただ、遊園地であれば、後樂園、舞浜、千葉など、日本の首都圏には複数の日帰り施設がありますが、台北だと、選択肢はあまりありません。また、これが無いというものを考えると、水族館がありません。広い意味での娯楽という意味では、競馬、パチンコなどありません。

また施設型ではありませんが、その他娯楽として、野球の代表戦や、日本のアーティストの公演なども楽しめます。いわゆるコンサート以外でも、宝塚、N響が来たり、新日本プロレスも来ています。一方、大々的なプロモーションがなされないコンサートも多く、ニュースで知ったときは、すでにコンサートのために来台していた、ということもよくあります。誰か来たなら行ってみたいという場合は、ために、インターネットで”台湾公演”と、検索しておく必要があります。

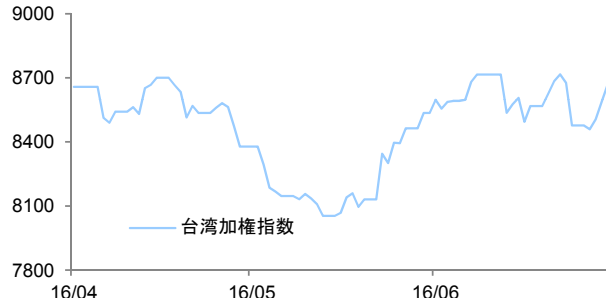
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/7	CPI(前年比)	5月	1.68%	1.24%	1.88%
6/7	輸出(前年比)	5月	-9.90%	-9.60%	-6.50%
6/7	輸入(前年比)	5月	-10.80%	-3.40%	-9.60%
6/20	輸出受注(前年比)	5月	-7.00%	-5.80%	-11.10%
6/22	失業率	5月	3.95%	3.96%	3.97%
6/23	鉱工業生産(前年比)	5月	-1.20%	1.89%	-4.06%
6/30	台湾中銀政策金利	3Q	1.375%	1.375%	1.500%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7550 ~ 7.7800
HKD/JPY 12.73 ~ 13.41

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【6月の香港ドル直物相場】

ドル/香港ドルは、ネガティブサプライズとなった米5月雇用統計後の米ドル売りにより7.77の水準を維持できず7.76をも割り込んだ。香港に上場する中国企業の配当支払いも香港ドル買いの要因となった。加えて、PERが10倍程度に留まっている香港株式市場に対し、中国の投資家の関心が高まってきている。上海・香港の両証券取引所間での株式相互取引において香港への投資額は中旬移行+20%超増加し、香港への資金流入をもたらした。英国のEU離脱投票の結果が出て以降、香港ドル市場は比較的落ち着いた様子で、ドル/香港ドルの上値は7.762に留まった。

【6月の香港ドル金利】

指標金利である3か月物HIBORは、香港ドルの潤沢な流動性を背景に0.53%前後で推移。香港金融管理局(HKMA)が発表する当座預金残高は3,000億香港ドル程度の水準に留まった。同残高は香港の銀行間市場における流動性の尺度として捉えられている。その一方、FRBが経済見通しを下方修正し3か月物ドルLIBORが低下したことから、3か月物の香港ドルHIBORとドルLIBORの金利差は縮小した。1年のドル/香港ドルフォワードポイントは香港ドルの流動性が豊富に維持されるとの見方からマイナス圏で推移した。香港ドルベーススワップ(香港ドルHIBOR-ドルLIBOR)カーブはマイナス幅を縮小した。主な要因として挙げられるのは香港企業によるドル建て社債の発行であり、調達したドルを香港ドルに交換することに起因する。

【6月の香港株式市場】

ハンセン指数は、英国のEU離脱リスクの高まりから一時20,000を割り込んだものの、世論調査で残留派が再び優勢を示したことを受けて20,500を超える反発。上海・香港の両証券取引所間での株式相互取引を通じた中国からの資金流入も株価を下支えた。しかしながら離脱が現実のものとなると強い売り圧力を受け、一時20,000割れまで急落した。

■ 今月の見通し

【7月の香港ドル直物相場】

ドル/香港ドルは7.75から7.77のレンジ推移を予想する。FRBのハト派的スタンスが引き続き香港ドルを下支えすると見られる。また、中国の株式市場が勢いを欠く中において、深セン・香港の両証券取引所間での株式相互取引が実現すれば香港への資金流入がもたらされるだろう。しかし、配当支払いのための香港ドル需要は7月に剥落し、ドル/香港ドルはおそらく7.76から7.77の水準に戻ると見られる。とはいえFRBが利上げを遅らせる可能性が高いことから、上値は抑えられるだろう。また中国経済と人民元市場のセンチメントは3月以降かなり安定化しており、1月に見られたような急騰はありそうもない。

【7月の香港ドル金利市場】

香港ドルの流動性は引き続き概ね安定して推移するものと見られ、当面香港ドル金利の上値を抑えることとなろう。他方、米国内の景気減速懸念と世界経済の不確実性の高まりを背景にFRBがハト派になったことから、ドル/香港ドルベッグ制の下で香港ドル金利の上昇ペースも抑えられよう。

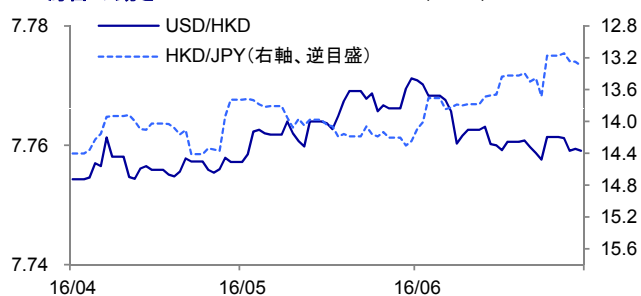
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の娯楽施設事情』

香港で最も人気のあるテーマパークは1977年にオープンした香港海洋公園である。海洋生物のテーマパークだが、海洋生物に留まらず動物展示やアトラクションも楽しめるのが特徴である。家族でジャイアントパンダやイルカショーを見てもよいし、アミューズメントパークでアトラクションに興じるのもよいだろう。また目玉施設の一つとして、丘の上のヘッドランド・パークと海辺のローランド・パークを結ぶ1.5kmのケーブルカーが挙げられる。2005年には香港ディズニーランドがオープンし、それ以来香港海洋公園と競い合っている。香港ディズニーランドはメインストリートUSAやアドベンチャーロードといった7つのメインエリアで構成されており、ディズニーキャラクターに出会ったり夜には花火を楽しむことができる。しかし世界中のディズニーランドの中で最も面積が小さいため、混雑に悩まされることになるだろう。

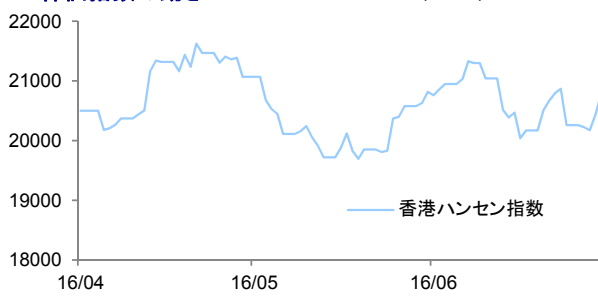
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/3	日経香港PMI	5月	--	47.2	45.3
6/7	外貨準備高	5月	--	\$360.3b	\$360.8b
6/14	PPI 前年比	1Q	--	-2.80%	-3.20%
6/16	失業率(季調済)	5月	--	3.40%	3.40%
6/21	CPI(コア)(前年比)	5月	--	2.60%	2.70%
6/27	輸出(前年比)	5月	--	-0.10%	-2.30%
6/27	輸入(前年比)	5月	--	-4.30%	-4.50%
6/27	貿易収支	5月	--	-26.2b	-31.0b
6/30	小売売上高(価額、前年比)	5月	--	-8.4%	-7.50%
6/30	小売売上高(数量、前年比)	5月	--	-9.0%	-7.60%

(資料) ブルームバーク

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.5600	~	6.7600
	CNY/JPY	14.35	~	16.01
	100JPY/CNY	6.3100	~	6.8200

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 上城戸 千尋

■ 先月の為替相場

【為替相場:6.55~6.66の推移。英国国民投票を受けて人民元安進行】
月初は一時人民元高が進行するも、その後は人民元安基調での推移。6月3日に発表された米5月雇用統計が市場予想を大きく下回る結果となったことで、5月末から高まっていた米6月利上げ観測が後退。ドルが大きく下落する展開にドル/人民元は6.5850から一時6.5515まで人民元高が進行。翌6月6日の人民銀行(PBoC)仲値は前営業日対比296pips元高水準に設定された。英国のEU離脱(Brexit)を問う国民投票に対する警戒感からグローバルにボラティルな相場展開となる中、ドル/人民元は6.57から6.59レベルのレンジで方向感無く推移。6月23日に行われた英国国民投票の開票が翌24日に実施され、次第に離脱濃厚との情勢が明らかになるとドルが上昇する動きに連れられドル/人民元は6.57レベルから6.62レベルまで一気に人民元安が進行。その後も節目と考えられていた年初来安値水準の6.60を超える水準での推移を継続。オフショア人民元は2016年1月以来の安値まで人民元安が進行。オンショア人民元とオフショア人民元の乖離は一時340pips程度まで拡大した。28日のPBoC仲値は2010年12月以来の人民元安水準となる6.6528で設定され、オンショア・オフショアともに人民元安圧力が高まっている状況。

【金利相場:流動性懸念解消、安定した相場推移】

6月は半期末ということもあり資金需要の高まりから市場流動性がタイト化する場面も見られたが、PBoCによる公開市場操作等が効果を発揮し安定して推移。月初は公開市場操作では期日到来分も合わせて、連日ネットで資金吸収となるも、中資系銀行が市場に資金を供給し続けていた事や、中期貸出ファンリティー(MLF)での資金供給等もあり流動性は安定。月末にかけては半期末を前にした資金需要を背景にややタイト化し、マネー金利は上昇する場面も見られたが、引き続きPBoCによる公開市場操作等により流動性は保たれている状況。

■ 今月の見通し

【為替相場】

今月は一時的に元安方向に推移すると予想。先月の英国国民投票の結果を受けて、Brexitの影響がどの程度なのか、どこまで波及するのかを市場参加者は見極めようとしている状況。足許では一時的にリスク回避的なドル買い、円買い、ユーロ売り圧力が強まると見られ、ドルインデックスの上昇から人民元安方向に進む可能性が高いだろう。しかし、Brexitに向けたプロセスが徐々に明確になるにつれマーケットは落ち着きを取り戻すことが想定される。また、人民元においては当局による外貨買い規制や、オフショア人民元とオンショア人民元の乖離幅が大きくなった際の当局による介入の可能性等を背景に極端な相場変動は抑えられると見ている。このほか、7月15日には中国4~6月期GDPが発表される予定であるが、成長率が政府目標の+6.5~7.0%を下回る結果となった場合は人民元安の材料となるだろう。

【金利市場】

当局の金利市場を安定的に推移させようとする姿勢に変化は見られず、中資系銀行による資金供給も継続的に見られていることから、今月は安定した推移を予想する。先月、半期末を控え小幅上昇した金利水準の戻りには注意が必要。

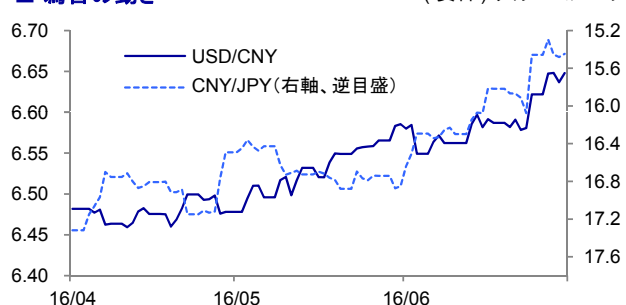
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の娯楽施設事情』

このタイミングでこのテーマ、書くことはあれしかない！ということで“上海ディズニーランド”について触れたいと思います。2016年6月16日にオープンした上海ディズニーランドは、世界で6か所目で、総面積は東京ディズニーリゾートの約2倍もあるそうです。正式オープンに先立ち、5月下旬からのプレオープンに遊びに行った同僚から聞いた話をご紹介します。プレオープンと云えど、乗り物に乗るには30分~5時間程度かかり、同僚も3時間並んで“ソアリン・オーバー・ザ・ホライズン”というアトラクションに乗ったとのこと。この“ソアリン・オーバー・ザ・ホライズン”は、世界を空中散歩できるようになっており、世界のいろんな美しい景色を堪能できるとともに、その現地のにおいまでも感じられるようになっているようです。「混雑しているけれどもう一度行って乗りたい！」と同僚は言っておりおすすめです。パーク内のご飯は少し割高ですが、80元程度(約1,300円)でドリンクセットの美味しいご飯が十分食べれるようです。報道されているマナー違反については特段気にならず、一部の人のマナー違反が大きく報道されている可能性もありそうです。中国国内だけでなく、近隣諸国を中心にたくさんの方が訪れて混雑必至ですが、私も上海にいる間に訪れたいと思います。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	製造業PMI	5月	50.0	50.1	50.1
6/8	貿易収支(RMB建)	5月	387.20B	324.77B	298.00B
6/8	輸出(RMB建)(前年比)	5月	1.5%	1.2%	4.1%
6/8	輸入(RMB建)(前年比)	5月	-2.5%	5.1%	-5.7%
6/9	CPI(前年比)	5月	2.2%	2.0%	2.3%
6/9	PPI(前年比)	5月	-3.2%	-2.8%	-3.4%

(資料) ブルームバーク

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3300 ~ 1.3800
SGD/JPY 73.50 ~ 77.50

アジア・オセアニア資金部 吉田 聡

■ 先月の為替相場

6月のシンガポールドル(SGD)相場は、上昇。月の初旬に発表された米5月雇用統計が非常に弱い結果となったことで、米早期利上げ期待の剥落とともに市場ではドル売りが台頭、SGDは5月のSGD安相場からは一転し、6月はSGD高進行の月となった。ただし、注目されていた英国の国民投票にて、EU離脱派が市場の予想に反して勝利すると、SGDは月末にかけて上昇幅を削っている。

月初、SGDは1.37台後半でスタートしたが、3日に発表された米5月雇用統計にて非農業部門雇用者数が3.8万人増と、予想の16万人増を遥かに下回ると、市場はドル売り一色となり、SGDは1.35台半ばまで急騰した。その後、イエレンFRB議長が講演にて今回の雇用統計結果に懸念を表明すると、米国の利上げ観測がさらに弱まり、SGDは1.35台前半まで続伸。8日に発表された中国の貿易統計で輸入が予想以上に堅調な数字となったことも手伝い、この週、結局SGDは1.34台半ばまで値を伸ばしたが、週後半は英国のEU離脱を問う国民投票への警戒感の高まりとともに、1.36近辺まで売り戻された。

13日以降のSGDは、24日に結果発表となる英国国民投票まで緩やかなSGD高が続いた。この間、複数の世論調査にてEU離脱派の支持率が残留派を上回る結果が発表されたことで、市場ではリスクオフムードが広がる場面もあったが、SGDへの影響は限定的だった。寧ろ、15日の米FOMC、16日の日銀決定会合の双方にて現状維持が決定されたことで、市場ではドル売り・円買いが強まり、SGDはドル円での円高進行につられて1.35近辺まで上伸、その後も英国の世論調査でEU残留観測が高まるにつれ、SGDは月高値となる1.33台前半まで値を伸ばし、英国国民投票の日を迎えた。

24日、注目されていた英国国民投票にてEU離脱派の予想外の勝利が報じられると、マーケットは完全にリスクオフの展開。SGDは他のアジア通貨同様、大きく売り込まれ、一時1.37近辺まで急落した。その後、利益確定の買戻し等で1.35近辺に戻すも、月末にかけては、大相場の疲れもあって方向感を失い、結局同レベルで一進一退の動きを続けている。

■ 今月の見通し

7月のシンガポールドル(SGD)相場は、緩やかなSGD高を予想。想定していなかった英国国民投票でのEU離脱派勝利は、6月の為替相場を一変させる出来事となり、投票後のアジア・新興国通貨はリスクオフの流れを受けて売りで反応、SGDも例外ではなく、投票前に比べその水準を大きく切り下げた。7月以降も英国のEU離脱の経済的影響への懸念から、アジア通貨には売りが入りやすい地合いが続くそうだが、一方でこの決定を受け、米国の利上げ姿勢が後退する公算も高く、SGDに関しては一旦落ち着きを取り戻すと考えている。

金融危機発生時に売り圧力が高まりやすいのは、得てして経常赤字国の通貨であり、盤石の財務基盤と安定した経常黒字を誇るシンガポールは、域内の比較でいえばリスクオフ時でも安定推移が見込まれやすく、実際、6月に英国国民投票への不透明感を材料に他のアジア通貨が売られていた時期も、SGDは寧ろその水準を切り上げていた。また、前述の通り、近年為替市場の主役となっている米国に目を向ければ、足許は直近の弱い雇用統計結果を受けて米利上げ観測が後退している局面であり、ドル買いが強まるシナリオは描きづらい。英国経済への影響が顕在化してくるまでの間は、外部要因としてのSGD売りは一旦歯止めがかかるだろう。

一方、シンガポールの経済状況からはSGD買い材料は特に見当たらない。外需の持ち直し調子が明確とならない中、国内消費は芽えない動きが続いており、6月15日に発表された4月小売売上高は前年比+3.8%と前月(同+5.2%)から減速。23日に発表された5月CPIも前年比▲1.6%と前月からマイナス幅が拡大、コアCPIについても+1.0%と市場予想(+1.2%)を下回った。英国のEU離脱の報はシンガポール経済にプラスに働くことは考えられず、国内要因でSGDが買われる展開は想定しにくいものの、かといってSGD売りになるほどの弱さは現状では見受けられない。

以上のことから、7月のSGDは買い込まれることにはならないものの、ドル買いも続かない中、6月につけた月高値1.33台の前半を目途に、緩やかにSGD高方向へ戻していく展開を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の娯楽施設事情』
シンガポールでバツと思いつく娯楽施設はカジノ(Marina Bay Sands、セントーサ島)や競馬場です。って本欄の趣旨からは外れていそうなので真面目に書きますと。。

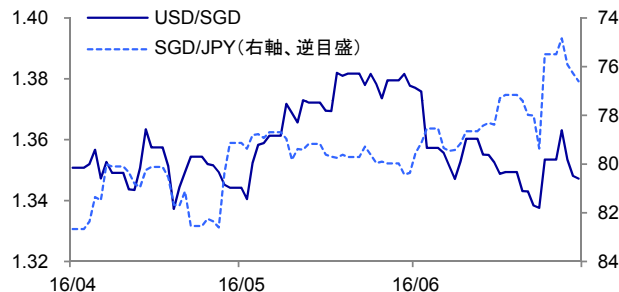
エンターテインメント系であれば、USS(ユニバーサル・スタジオ・シンガポール)や水族館、映画館、動物園(ナイトサファリ、リバーサファリなんてのもあります)、パードパークなどでしょうか。また、USSがあるセントーサ島自体も、巨大マーライオンなどを有しており、巨大な娯楽施設と言えるかもしれません。

また、狭い国土ながら公園が充実しているのシンガポールの特徴かもしれません。特に、東西数キロに渡るイースト・コースト・パークは自転車のレンタルや、疑似的なサーフィンやウェイクボードの体験場、フットサルコート等、体を動かす意味での娯楽施設は非常に充実していると思います。

日本のようにマンガ喫茶や遊園地が多数ある訳ではありませんが、シンガポールでも楽しめる施設はたくさんございますので、円高のうちに是非お出下さい。
(小泉)

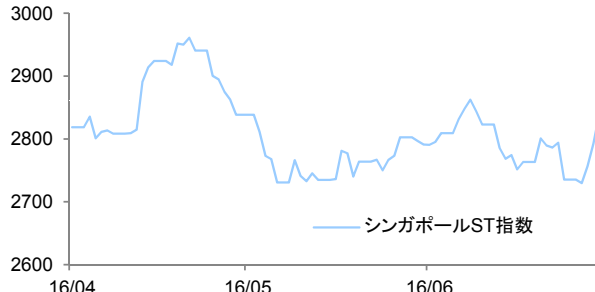
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/2	購買部景気指数	5月	49.7	49.8	49.8
6/2	電子産業指数	5月	-	49.1	49.5
6/15	小売売上高 (前年比)	4月	6.1%	3.8%	5.2%
6/17	非石油輸出 (前年比)	5月	-1.6%	11.6%	-7.9%
6/23	CPI (前年比)	5月	-0.8%	-1.6%	-0.5%
6/24	鉱工業生産 (前年比)	5月	1.0%	0.9%	3.0%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 35.00 ~ 36.00
THB/JPY 2.80 ~ 2.97

バンコック資金室 関 浩士

■ 先月の為替相場

●ドル/バーツは下落

月初のドル/バーツは35.73バーツで取引を開始したが、5月CPIが前年比+0.46%のプラスと2か月連続でプラス圏を推移すると、ドル/バーツは35.61バーツまで水準を切り下げた。3日の海外時間に発表された米5月雇用統計が弱い結果となるとドル/バーツは35.33バーツまで急落し、7日には外国人投資家によるタイ債券買い越し額が2013年9月以来の高水準となると、米利上げ観測の後退も俟って、35.21バーツまで下落した。8日には、海外時間にナイジェリアの武装勢力が米石油大手油井を爆破との報道を受けて原油価格が上昇するとドル売り優勢の展開となり、9日にはドル/バーツは月間安値となる35.09バーツまで下落したが、英国のEU離脱懸念からポンドが急落し、欧州株が下落するとリスク回避の動きにドル買いが進行し、35.23バーツまで値を戻した。

月半ば、英国のEU離脱(Brexit)を巡る国民投票を控え、一部の世論調査で離脱派が優勢となるなどEU離脱への懸念からマーケット全体にリスクオフムードが蔓延し、大半のアジア通貨が下落したものの、タイ債券市場で外国人投資家の資金流入超となったことで、ドル/バーツは値持ちした。14~15日のFOMCにおいては市場予想通り利上げが見送られ、年内1回の利上げを予想するメンバーが前回の1人から6人に増加するなど、ハト派寄りの内容となると、ドル売り優勢の展開となり、更に16日、日銀が金融政策の現状維持を決定するとドル円が急落する動きにドル/バーツも35.16バーツまで下落した。しかしながら、インドネシア中銀が利下げしたこと背景に切り返す展開となり、海外時間には35.35バーツまで上昇した。22日には、タイ中銀が金融政策決定委員会(MPC)で市場予想通り全会一致で政策金利1.50%の据え置きを決定。海外時間には英国のEU残留との見方が一段と高まったことでリスクセンチメントが改善し、35.17バーツまで下落した。

月末に掛け、EU離脱に関する英国の国民投票を控え、相場は35.20バーツ台にて小幅な動きが続いた。24日の国民投票の開票結果が、予想外の離脱優勢となると、リスクオフムードの高まりを受けてドル/バーツは一時35.53バーツまで急上昇した。然しながら、翌週にはタイ中銀がBrexitの影響はタイ経済には限定的になるとの見方を示したことや、タイ国内資産への資金回帰のフローが強まったことからバーツ買い優勢の展開となり、29日には一時35.10バーツ近辺まで下落する展開となった。

■ 今月の見通し

●ドル/バーツの上値は限定的か

英国の国民投票においてEU離脱への賛成票が過半数を上回ったことで、足許の金利先物市場から推測される米国の利上げ確率は、年内12月までは6月30日時点で11.8%となっており、市場ではFRBの年内利上げ観測は大幅に後退している。

一方、タイ金融政策については、6月22日に開催されたMPCでは、全会一致で政策金利1.50%の据え置きが発表され、声明文では、タイ経済は公共支出と観光セクターの改善を背景に回復基調を続けているとしたが、民間投資が低水準にとどまり、輸出も周辺諸国の景気鈍化の影響で引き続き減少傾向をたどっていると指摘。注目すべきは、主要先進国間の金融政策の相違、英国の欧州連合からの離脱をめぐる国民投票の行方、中国における金融不安などのリスクを踏まえ、金融政策の変更余地を残したとしており、周辺国の金融政策動向や、世界的なリスクオフの動きによっては、タイの追加金融緩和の可能性があると言えよう。

また、タイ商務省が発表した貿易統計では、5月の輸出額は前年同月比▲4.4%の176.1億ドルと2か月連続でのマイナス。中国向けの農産物輸出をはじめ、全体的に低調。品目別では、全体の8割を占める主要工業製品が前年同月比▲2.8%、農産物・加工品は同▲7.4%となっている。

英国のEU離脱の輸出への影響は向こう2~3か月はあるものの、英国向け輸出は全体の1~2%に留まるため、長期的な影響は軽微との見込み。タイ債券市場協会のデータを見ると、外国人投資家は月次ベースでタイ国債を大幅に買い越しており、タイ国債からの資金流出は限定的と見られる。

足許のドル/バーツは35.20バーツ近辺にて推移しており、ドル/バーツ為替市場は落ち着きを取り戻している。Brexitの反応としては、他のアジア通貨対ドル/バーツの上昇は限定的ではあったものの、今後アジア周辺国での利下げの思惑が高まる可能性もある。周辺国対比バーツ高となった場合にはタイ当局のバーツ安誘導への動きも想定されよう。今月のドル/バーツはリスクオフの地合に底堅い動きと見るが、米国利上げ観測の後退を背景に、上値は限定的と予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の娯楽施設事情』

バンコクの娯楽と言えばゴルフのイメージですが、近郊には、遊園地、動物園、ゲームセンター、スケートリンク、ボーリング場等、娯楽施設はそれなりに揃っておりま。但し、何はともあれ常に暑いバンコク。小さい子供がいると、どこで遊ばせるか悩む日々が続きます。個人的にはやはり涼しい屋内の施設に逃げ込む事が多くなり、都心の商業施設サイアムパラゴン内にある水族館はリピーターになっております。沖縄美ら海水族館より大きいそうで、涼しくて近いその利便性の反面、外国人料金約2,800円と結構な値段です。

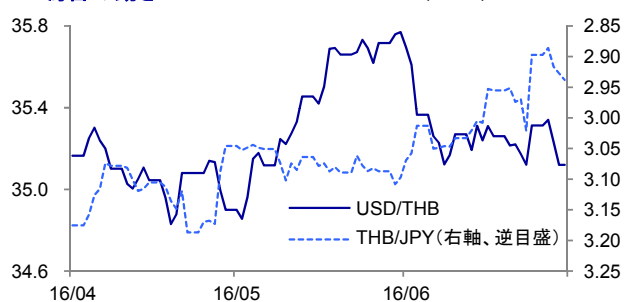
涼しいところでは、スノータウンという雪の屋内テーマパークが昨年完成しました。雪の上をソリで滑って遊べるので子供は大喜びですが、雪というかほぼ氷なので転ぶと非常に痛いのが難点。手軽に安く涼しいところでは映画館。価格は450円程度と日本の半額ぐらいで、ポップコーンとコーラの方が高いくらいです。VIP向けの高額シートもあり、食事をしたり、寝ながらだらだらと映画鑑賞が出来ます。そんな極限まで寛こうとする姿勢にタイ人らしさを感じます。

ローカル感満載の娯楽施設なのは、ワニ園。開いたワニの口の中に、頭を突っ込んでいる写真をどこかで見た事がないでしょうか。1時間毎に開催されるショーでは、ワニ使いのお兄さん達が、過激に巨大ワニと戯れますので、観客席からはその都度、おひねりが投げ込まれます。ワニへ餌やりも出来ますが、竿の先に付ける餌が、丸まる一匹のニワトリだったのは衝撃的でした。お土産屋ではワニ革の鞆や財布はもちろん、ワニの乾燥肉も買う事も出来ます。

とは言え、休みの日に子供をどこで遊ばせているか駐在員に聞くと、結局「プールで遊ぶ」でした。年中暑いバンコク、手軽な娯楽施設と言えばやはりプールが一番のようです。(関)

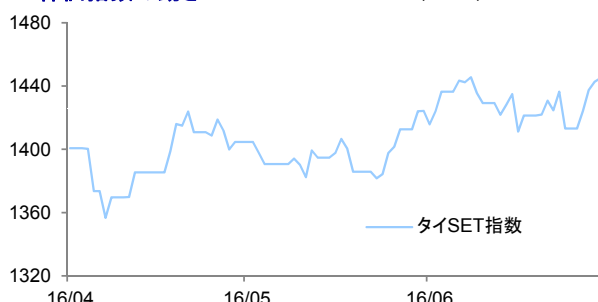
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	CPI (前年比)	5月	0.27%	0.46%	0.07%
6/9	消費者信頼感	5月	-	72.6	72.7
6/22	政策金利		1.50%	1.50%	1.50%
6/24	通関貿易収支(USD)	5月	\$2434M	\$1540M	\$721M
6/28	自動車販売台数	5月	-	66035	54986
6/30	製造業生産指数	5月	2.0%	2.6%	1.5%
6/30	設備稼働率指数	5月	-	67.5	58.4
6/30	輸出 (前年比)	5月	-	-3.7%	-7.6%
6/30	経常収支	5月	\$3112M	\$2234M	\$3164M

マレーシアリング相場

予想レンジ: USD/MYR 4.00 ~ 4.20
MYR/JPY 24.00 ~ 25.95

アジア・オセアニア資金部 宮地 崇

■ 先月の為替相場

先月のマレーシアリングは、4.12台後半でオープン。月初は、前月末にイェレンFRB議長が6月の利上げを排除しないとのスタンスを示したことを材料に、ドル買いの流れが継続したことや、外国人投資家の国債売却に伴うリング売りの動きから、2日にはリングは一時4.1750まで売られた。3日には前日のOPEC総会にて原油生産目標の設定では合意できず、各国の任意量の生産を事実上承認した格好となったものの、原油相場への影響は限定的であったことから、リング相場も小動きとなった。

6日には前週末に発表された米5月雇用統計が予想を大幅に下回る弱い結果となったことから、ドル売りが進行。週明けのリングも窓を開け、4.0900近辺で取引開始。原油相場が堅調推移となったことも寄与し、リングはじりじりと買われる展開、4.0230レベルをつけた。

ところが、月半には英国のEU離脱懸念が高まったことから、リスク回避ムードがリングにも波及。週初は4.10レベルでギャップオープン。その後、4.07台半ばまでややリングが買戻される局面もあるも、週央には再びリスクオフモードに4.11台ミドルレベルまで軟化。注目の米FOMCでは、ハト派色の強い内容となったことで、翌16日のドル/リング相場はドル売りで反応、4.08台前半までリングが上昇した。

月後半に入るとまず20日には、英国のEU離脱懸念が後退したことを背景にリスク回避スタンスが大きく緩和。この流れにリングは前週末の4.10レベルから4.08台前半と再びギャップオープン。その後もリング高が続き、24日には一部通信社が英国の国民投票で、残留派が優勢との与論調査を示したことで、リングは先月の高値となる3.98台後半まで上昇した。しかし、開票が進むにつれて離脱派が優勢となったことで、リングは急速に売られる展開。離脱派勝利が確定的となると、リングは一時4.14台半ばまで急落した。

月末週に入ってもリスクオフモードは不変。リングの値動きはやや落ち着きを取り戻すも、4.10台を中心に上値の重い展開が続いた。

■ 今月の見通し

先月下旬に、英国の国民投票で離脱派が勝利したことで、市場のセンチメントはリスクオフモードに大きく傾斜。市場の緊張度が高まる局面では、総じて新興国通貨は上値が重くなることが想定されるなかで、マレーシアリングについても軟調な値動きとなることを予想する。

また、今年に入りマレーシアリングとマレーシア長期国債の相関性は高く、マレーシア国債が買われればリング高、売られればリング安という状況が散見された。今回の英国でのEU離脱派勝利の報道を受け、リスクオフモードが強まるなか、先進国の長期国債が軒並み安全資産として選好された一方で、東南アジア域内では、国債の外国人保有比率の高いマレーシアやインドネシアの債券は売りが先行した。市場のセンチメントが変わらない限り、同様な動きが当面続くものと考えられ、マレーシア国債売りが継続することにより、リングの上値も限られてくるものと思われる。

加えて、これまで回復基調を維持していた原油も、商品市場では安全資産として金が急上昇する展開とは対照的に上値の重い展開。マレーシアの主要輸出品目であるLNGやパーム油等も連れ安となる公算が大きく、こちらもマレーシアリングにとっては売り要因として機能しよう。

一方、先月、マレーシアでは2つの地域での補選が実施され、与党連合・国民戦線(BN)の候補が共に勝利しており、ナジブ首相の求心力低下にある程度の歯止めが掛かったものと考えられる。同じく先月末には内閣改造にも着手、政権基盤の足固めも進めており、1MDB問題は燻ものの政権の安定化はリングのサポート要因となろう。

しかしながら、Brexitショックが短期間で解決することは考えづらく、その動向に注意する必要があるが、基本的にマレーシアリングの上値の重い値動きとなることをメインシナリオとしたい。

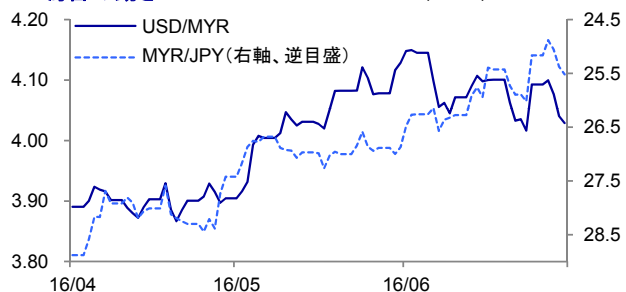
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の娯楽施設事情』
最近、この手の「当地のxx事情」というのを見るに付け、如何に自分自身が国内旅行に行っていないか痛感します。今月のお題である娯楽施設についてもやはり然りで、駐在2年ちょっとで行ったことがあるのはKL市内にあるコンベンションセンター地下の水族館とマラッカに行ったついでに覗いた博物館くらいです。その水族館ですが個人的に最大の癒しを感じるペンギンがいないのはさておき、それなりに楽しめはします。またマラッカの博物館(どの博物館に行ったかは覚えておらず名前は不詳)ですが、マラッカの成り立ちがコンパクトに纏められており良い勉強になりました。周りで良く行くところにはジョホールバルにあるレゴランド、ゲンティンハイランドにあるカジノとかでしょうか。前者はレゴランドが経営するホテルとセットで子供連れで行く人が多い印象で、後者は一度行けばもう満足、と言う人が多いような気がします。何れにしても今のラマダン中はマレー系のムスリムの人達は太陽が出ている時間は飲食できないので、暑さに耐えられるなら動物園やテーマパーク等の屋外娯楽施設は特に空いているかと思います。

(マレーシアみずほ 山田)

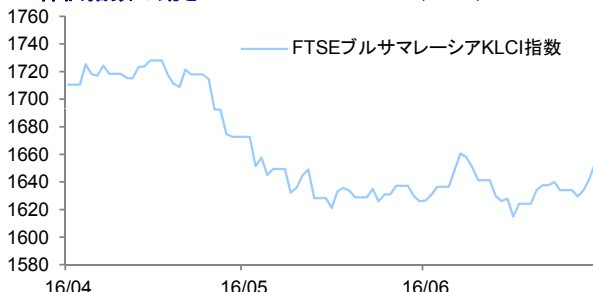
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/3	輸出 (前年比)	4月	2.0%	1.6%	0.2%
6/3	輸入 (前年比)	4月	0.0%	-2.3%	-5.5%
6/3	貿易収支 (MYR)	4月	8.56b	9.06b	11.19b
6/10	鉱工業生産 (前年比)	4月	3.5%	3.0%	2.8%
6/15	消費者物価指数	5月	2.0%	2.0%	2.1%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 13000 ~ 13600
 IDR/JPY 0.73 ~ 0.80
 JPY/IDR 125.01 ~ 137.35

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

インドネシアみずほ銀行 河合 良介
 アジア・オセアニア業務部 小泉 聡

■ 先月の為替相場

6月初旬は予想を下回った米5月雇用統計を受けてドル安・ルピア高が進行するも、英国のEU離脱が決定されるとルピアが軟調となる展開に。

月初のドル/ルピアは13600台後半にてスタートしたが、3日発表の米5月雇用統計が予想を大幅に下回ると(非農業部門雇用者数が事前予想の前月比+16.0万人に対し、結果は同+3.8万人)、翌週以降はドル安・ルピア高の流れとなり、8日には13200台前半まで下落した。

その後は13300前後での揉み合いとなり、23日のEU離脱(Brexit)に関する英国の国民投票を迎えたが、24日に離脱派が優勢と伝えられると、相場はルピア売りで反応。ドル/ルピアの23日終値は13250付近だったが、24日には一時13500を超える水準に上昇するなど、24日の日中は激しい値動きとなった。また、全般的に円高が進行したことから、24日の円/ルピアは一時1円=134ルピアを超える水準となり、リーマンショック時に迫る円高・ルピア安水準を付けた。尚、週明け27日もルピアは軟調推移が継続している。

インドネシア国内では、16日に開催されたインドネシア中銀(BI)の金融政策決定会合にて利下げが決定され、BIターゲットレートは6.50%へ引き下げられた。事前予想は金利据え置きが優勢だったため、サプライズとなったが、ルピア相場への影響は限定的となった。

■ 今月の見通し

今月のルピアは値動きの荒い展開を予想する。

7月4日の週はレバラン休暇(断食明け大祭)となることから、市場はほぼクローズ(4日のみBIは限定オペレーションを実施予定)であり、実質的に7月11日が本格的な始動となる。

引き続き、英国によるBrexit問題及びEU他国の動向、そして米金融政策の動向がルピア相場を左右するだろう。基本的にBrexit問題はリスクオフの地合いを醸成しやすいことから、ルピア相場は軟調の展開を予想する。

また、レバラン休暇直前に米6月雇用統計が発表され、休暇中も主要通貨は荒れた展開が予想されるため、レバラン休暇後のルピア相場の動きには留意しておきたいところだ。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の娯楽施設事情』

ジャカルタで生活していると娯楽が無く、休日は専らゴルフ→マッサージ→飲みというゴールデンコースに陥りがちですが、探してみれば娯楽施設が無いわけではありません。

例えば動物園。市内の近くには歴史の古いラグナン動物園がありますが、何故か大半のコーナーで動物自体がおらず、単なる公園と化しておりました。私が行った時がたまたま清掃中だったのででしょうか。

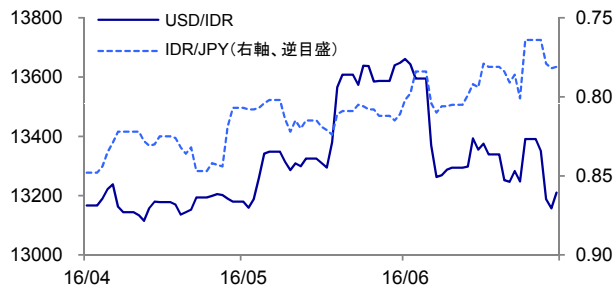
しかし、ボゴール(市内から車で約1時間半)にある「タマンサファリ」は見ごええ満点でしょう。サファリパーク手前の露店でエンジンの束を購入し、自らの車でサファリパークに突入。車の窓を開けてエンジンを突き出すと、シマウマが車の中に首を突っ込んできて迫力満点です。

遊園地系では、市内北に「アンチョールドリームランド」という遊園地があり、遊園地の中に水族館もあったので、カプトガニを見に行ったことがあります。しかし、遊園地は直前に遊具の不具合等のニュースも多発したため、行く気がおきませんでした。

以上、数々の娯楽施設を列挙しましたが、よくよく考えてみると、いずれも家族連れでないと楽しめない施設であり、やはり単身者であるとゴルフに傾斜してしまうのがジャカルタの現状かもしれません。

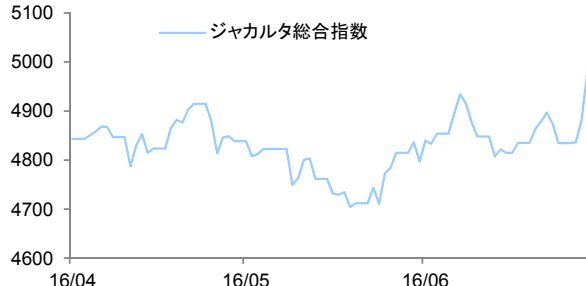
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	CPI(前年同月比)	5月	3.30%	3.33%	3.60%
6/7	外貨準備高(USD B)	5月	-	103.60	107.71
6/15	貿易収支 (USD M)	5月	723	376	667
6/16	BIターゲットレート	6月	6.75%	6.50%	6.75%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 46.00 ~ 47.50
PHP/JPY 2.09 ~ 2.25

マニラ支店 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

6月のドルペソ相場は46.755で取引開始となった。

月初のドル/ペソ相場は、3日に発表された米5月雇用統計の弱い内容から米利上げ観測が後退、ドルが対主要通貨で弱含む中、ドル/ペソ相場もペソ買いが優勢となった。

更に原油価格が上昇、資源国通貨がドル売りを先導し、リスク選好モードがアジア通貨高を牽引した。

ドル/ペソ相場は9日に46台を割り込み、45.86までペソ買いが進み、ここが月中のペソ高値となる。

しかしながら46割れの水準は長くは続かず。月央のドル/ペソ相場は月初に見られたペソ買いの反動が見られた。英国のEU離脱を問う国民投票を月末に控えていたこと、また、15日前後には輸入企業のドル買いニーズが高まることからじりじりとペソ安に推移、17日(金)は、46.445で取引終了となった。

20日(月)は46.39で取引開始。週末に英国のEU離脱懸念が後退したことから取引開始後こそペソ買い圧力が強まるも、英国の国民投票の前にリスクヘッジフローが多く見られて次第にドルが強含む展開に。

23日(木)にはフィリピン中銀の金融政策決定会合があり、市場予想通り政策金利は前回から据え置きとなった。相場への影響は限定的となり、ドル/ペソ相場は46.50～46.60水準での取引で金曜日を迎える。

金曜日に英国のEU離脱が現実味を帯びるとドル/ペソ相場は47手前までペソが売られる展開に。市場不透明感が払拭しない中、28日には6月のペソ安値である47.23で取引され、現在は47を挟んでの取引。(29日15時現在)

■ 今月の見通し

7月のドル/ペソ相場を予想するにあたり、英国EU離脱後のフィリピン市場の状況をおさらいしておきたい。
まずはドル/ペソの為替相場だが、月間でみるとペソ下落率は▲0.5%。ドル/ペソ相場の水準であるが、2016年のレンジである46～48の中心値での取引。

金利市場については、市場不透明感の高まりでドル調達圧力の高まりで為替スワップマーケットのペソ短期金利は1か月ものが1%ポイント近く低下。しかしながら現在は、行き過ぎたプライスアクションを修正する動き。

フィリピン株式市場は、英国EU離脱が決定した24日こそ前日比▲1.3%安で取引終了したものの、翌営業日より買い戻しが入り底固く、29日には、年初来高値を更新。2015年3月に付けた市場最高値の更新も視野に入っている。
英国離脱を材料に2014年から続く上昇基調の調整が入ってもおかしくない状況ながら、買い意欲旺盛である。

斯かる状況下、市場が更に落ち着きを取り戻せば、ペソ高に反転することが予想される。

フィリピン中銀は先月、政策金利を据え置き、今後の弾力的なオペレーション余地を残した(そもそもPHPの市場流動性は十分)。

市場が混乱すると国全体の外貨調達力に関してフォーカスが当たるが、この点についてはOFW(在外フィリピン人労働者)の送金でファイナンスされる構造。毎月発表される数字の変化にはこれまで以上に注意要だが、目先懸念はないと思われる。

6月30日にドゥテルテ新政権が発足。前政権の経済政策を踏襲することが予想されている。市場は政治リスクを嫌うが、それ以上に期待感が高まっている。46丁度を目指す展開か。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の娯楽施設事情』

フィリピン人は80%がキリスト教。敬虔な信者が多く、日曜日は教会に行く方が多い。

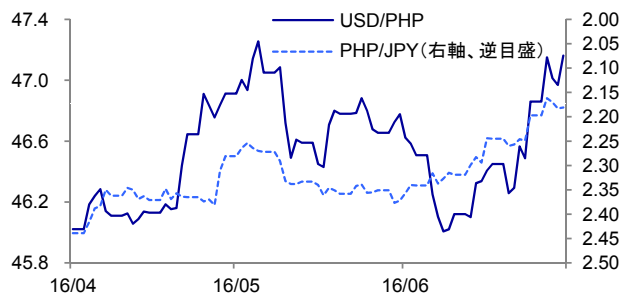
でも、日曜日でも遊びたい、なんてニーズがあったのかどうかは不明ですが、ショッピングモールの広大な中庭に特設ステージを設け、牧師さんの講話が聞けるんです。

講話が終わるとショッピング、食事を楽しみ、講話が始まれば戻ってくる。

日本で例えていうなら、アウトレットモールのど真ん中にステージを作り、お坊さんがお経をマイクとスピーカーを使って読み上げている！？、というイメージです。

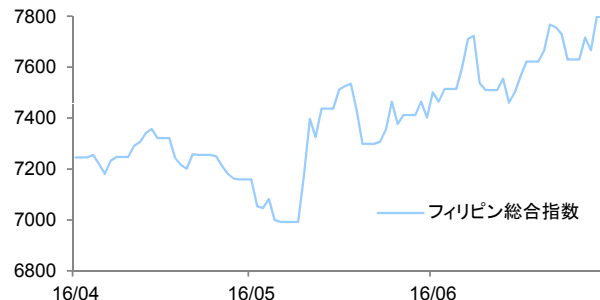
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
6/7	CPI (前年比)
6/7	外貨準備高
6/10	輸出 (前年比)
6/15	OFW送金額
6/15	OFW送金 (前年比)
6/23	中銀翌日物金利
6/24	貿易収支
6/29	国際収支

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
5月	1.3%	1.6%	1.1%
5月	-	835億ドル	837億ドル
4月	-4.7%	-4.1%	-15.1%
4月	-	22.1億ドル	23.6億ドル
4月	7.5%	4.1%	-1.2%
4月	-	3.0%	3.0%
4月	-183億ドル	-228億ドル	-175億ドル
4月	-	56億ドル	-74億ドル

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 66.50 ~ 69.00
INR/JPY 1.44 ~ 1.56

アジア・オセアニア資金部 木原 達章

■ 先月の為替相場

6月のルピー相場は、当初、9月に任期が切れるラジャン・インド準備銀行(RBI)総裁の去就についての観測記事などで売られる局面があるも、基本的には、米国利上げへの思惑、英国のEU離脱国民投票など海外動向に左右される展開。

月初、ラジャン総裁が「RBI総裁再任に後ろ向き」との記事で対ドルで67.50近辺まで売られるも、RBIがルピー買い介入をしたことや、米国5月雇用統計を受けて米国の早期利上げ観測が後退したことから、ルピーに買い戻しが入り、66.50近辺まで買い戻された。

7日、RBIは市場予想通り、政策金利であるレポレートで6.50%で維持するなど、金融政策の据え置きを発表。

10日のインド市場引け後に、印4月鉱工業生産、翌営業日13日のインド市場引け後に、印5月消費者物価指数(CPI)が発表されたが、鉱工業生産は市場予想前年比+0.6%を大きく下回る同▲0.8%、CPIは市場予想同+5.60%を上回る同+5.76%と、先月同様に両指標ともインド経済にネガティブな内容。

15日NY時間、FOMCでは金利据え置きとなったが、日にちが近付くにつれて市場コンセンサスが据え置きに固まっていたため、市場の反応は限定的。

20日は、週末にラジャン総裁が3年間の任期が満了する9月4日で退任することが発表され、ルピーは対ドルで67.6台後半までギャップダウンして週を始めるも、マーケットのリスク選好地合いもあり、それ以上売り込まれることなく、ルピーは買い戻された。

その後は、英国のEU離脱是非を問う国民投票に市場の目が向き、最終的にEU離脱との結果になると、市場は「リスクオフ」、「質への逃避」の流れとなり、日本円・米ドルに買いが入り、他の新興国通貨同様ルピーは対円・対ドルで大きく下落、対ドルで一時68.2台まで下落。その後、RBIのルピー買い介入が入ったと見られ、67台まで戻して終了。

■ 今月の見通し

7月のルピー相場は、引き続き、米国の利上げ動向、英国のEU離脱の実際の影響など、外部要因に左右され易い展開を予想。またラジャン総裁の後任人事にも注目が集まると思われる。

英国のEU離脱の影響を市場が消化するには、相応の時間が必要であると思われるが、リスクオフの動きからの原油価格下落は、原油輸入国インドには好材料で、ルピーのサポート要因。但し、2016年に入り反転上昇してきた原油価格が実際の消費者レベルに影響を与えるにはタイムラグがあると思われる、引き続き、原油価格・インフレ動向には注意が必要。また、モンスーン(雨季)の雨量は、インドの景気・インフレ双方への影響が大きいので注目。

インド経済は内需主導の経済であり、英国のEU離脱の影響は他のアジア諸国対比相対的には大きくないと思われる。今年のモンスーンは例年を上回ると予想されていることに加え、公務員の賃上げもあり、家計消費は徐々にしっかりしていくと予想。インフレ上昇が顕現化しない限り、RBIによる追加利下げ余地もあり、ルピーは相対的にしっかりした値動きになると予想。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の娯楽施設事情』

インドの娯楽といえば、何はなくともボリウッド映画。「(ボリウッド)とは、ムンバイの旧称ボンベイとハリウッドをもじってつけられたインド映画の俗称のことである)

今回、20年以上に渡り上映されている「Dilwale Dulhania Le Jayenge(勇者が花嫁を連れてゆく)」を観るため、ムンバイ支店から2駅先にあるMaratha Mandir 映画館へ足を運んだ。この映画はタイトルの頭文字をとって「DDLJ」の通称で愛されている。

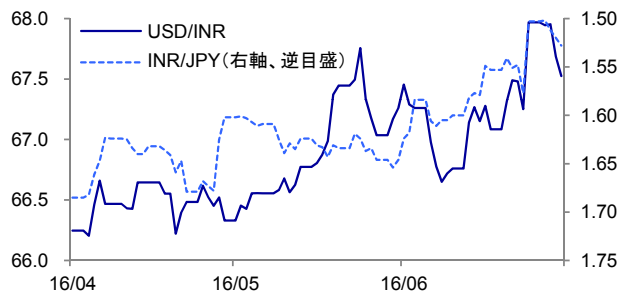
定刻通りに電車が来ることがすくないインドでも、ムンバイで映画を観るなら時間通りに席につきたい。というのも、映画の都ムンバイでは、上映前にちょっとした儀式があるからだ。開始時間になると、スクリーンにインドの国旗の映像が現れ、観客は一同起立。国歌が流れるのだ。突如あらわれた厳粛な空気のなかに、陽気なインド人の生まじめさと愛国心を感じられる瞬間だ。

3時間以上におよぶ映画だが、役者のわかりやすい表情とシンプルなストーリー展開、さらに観客の高笑い、指笛などの反応のおかげで、言語を理解せずとも楽しめる。クライマックスは、さながらサッカー観戦でゴールが決まったかのような盛り上がりで、観客との一体感に感動を覚えるほどだ。

長いロマンス映画が終わり街へ出ると、すぐそばにムンバイ最大の繁華街がある。希望に胸をふくらませた若い世代でわくムンバイだが、20年前と変わらない現実が目覚める。願わくば希望は映画のなかにとどまらず、現実の世界でも続きますように。

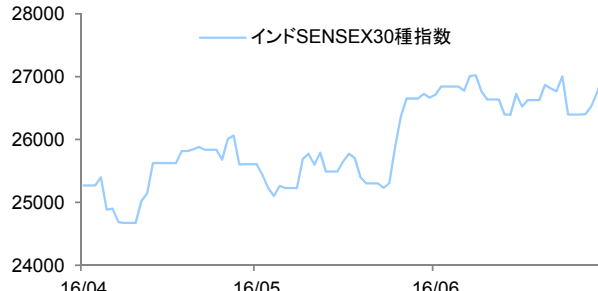
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

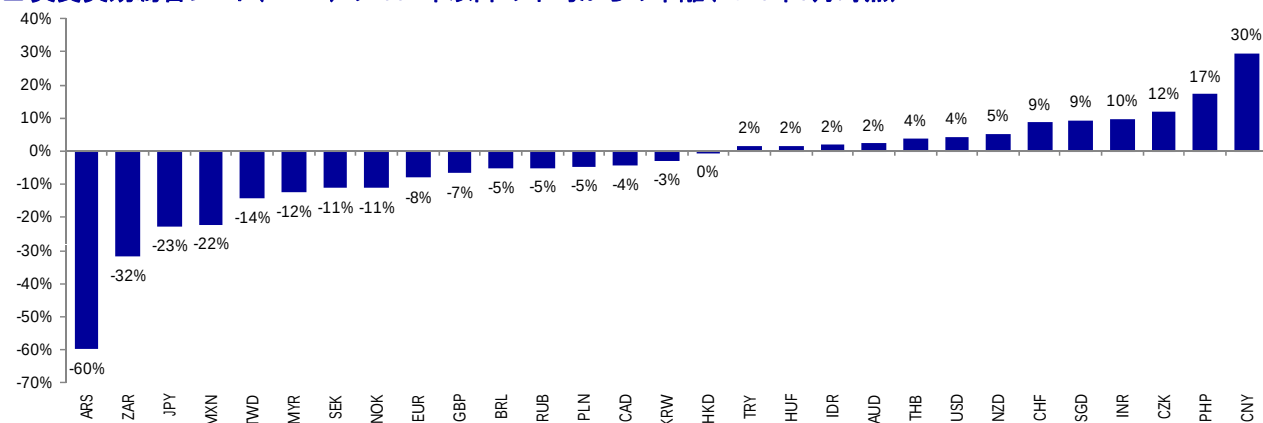
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	日経インドPMI製造業	5月	-	50.7	50.5
6/3	日経インドPMIサービス	5月	-	51.0	53.7
6/3	日経インドPMIコンポジット	5月	-	50.9	52.8
6/7	RBIレポレート	-	6.50%	6.50%	6.50%
6/10	鉱工業生産(前年比)	4月	0.6%	-0.8%	0.3%
6/13	消費者物価指数(前年比)	5月	5.60%	5.76%	5.47%
6/14	卸売物価(前年比)	5月	0.50%	0.79%	0.34%
6/15	貿易収支	5月	-\$ 6.0B	-\$ 6.3B	-\$ 4.8B
6/15	輸入(前年比)	5月	-	-13.2%	-23.1%
6/15	輸出(前年比)	5月	-	-0.8%	-6.7%

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2015年末	2016年6月末	騰落率	株式市場	2015年末	2016年6月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	17425.03	17929.99	2.9%	-
日本	USD/JPY	120.22	103.2	-14.2%	日経平均株価	19033.71	15575.92	-18.2%	-4.7%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0862	1.1106	2.2%	ドイツDAX指数	10743.01	9680.09	-9.9%	-9.9%
英国	GBP/USD	1.4736	1.3311	-9.7%	ロンドンFTSE 100指数	6242.32	6504.33	4.2%	15.4%
豪州	AUD/USD	0.7286	0.7451	2.3%	S&P/ASX200指数	5295.9	5233.375	-1.2%	-3.4%
カナダ	USD/CAD	1.3839	1.2924	-6.6%	S&Pトロント総合指数	13009.95	14064.54	8.1%	15.8%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.4937	6.648	2.4%	上海総合	3539.182	2929.606	-17.2%	-19.1%
香港	USD/HKD	7.7507	7.7591	0.1%	香港ハンセン	21914.4	20794.37	-5.1%	-5.2%
インド	USD/INR	66.1537	67.525	2.1%	インドSENSEX30種	26117.54	26999.72	3.4%	1.3%
インドネシア	USD/IDR	13788	13210	-4.2%	ジャカルタ総合	4593.008	5016.647	9.2%	14.0%
韓国	USD/KRW	1175.06	1151.8	-2.0%	韓国総合株価	1961.31	1970.35	0.5%	2.5%
マレーシア	USD/MYR	4.2943	4.0288	-6.2%	ブルサマレーシアKLCI	1692.51	1654.08	-2.3%	4.2%
フィリピン	USD/PHP	46.905	47.162	0.5%	フィリピン総合	6952.08	7796.25	12.1%	11.5%
シンガポール	USD/SGD	1.4185	1.3472	-5.0%	シンガポールST	2882.73	2840.93	-1.5%	3.8%
台湾	USD/TWD	32.862	32.258	-1.8%	台湾加権	8338.06	8666.58	3.9%	5.9%
タイ	USD/THB	36.03	35.12	-2.5%	タイSET	1288.02	1444.99	12.2%	15.1%

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2016年5月時点)



■ 実質GDP成長率

	2014Q3	2014Q4	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2015Q4	2016Q1	2014	2015
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	4.3	2.1	0.6	3.9	2.0	1.4	1.1	2.4	2.4
日本*	-2.7	2.1	5.2	-1.7	1.7	-1.8	1.9	0.0	0.6
ユーロ圏	0.8	1.0	1.3	1.6	1.6	1.7	1.7	0.9	1.7
英国	3.1	3.5	2.9	2.3	2.0	1.8	2.0	2.9	2.3
豪州	2.6	2.3	2.3	2.1	2.7	2.9	3.1	2.7	2.5
カナダ*	2.1	3.4	-1.0	-0.5	2.2	0.5	2.4	2.5	1.1
エマージングアジア									
中国	7.1	7.2	7.0	7.0	6.9	6.8	6.7	7.3	6.9
香港	3.2	2.5	2.4	3.1	2.3	1.9	0.8	2.7	2.4
インド	8.3	6.6	6.7	7.5	7.6	7.2	7.9	7.2	7.6
インドネシア	5.0	5.0	4.7	4.7	4.7	5.0	4.9	5.0	4.8
韓国	3.4	2.7	2.4	2.2	2.8	3.1	2.8	3.3	2.6
マレーシア	5.6	5.7	5.7	4.9	4.7	4.5	4.2	6.0	5.0
フィリピン	5.7	6.7	5.0	5.9	6.2	6.5	6.9	6.2	5.9
シンガポール	3.1	2.8	2.7	1.7	1.8	1.8	1.8	3.3	2.0
台湾	4.3	3.6	4.0	0.6	-0.8	-0.9	-0.7	3.9	0.7
タイ	0.9	2.1	3.0	2.7	2.9	2.8	3.2	0.9	2.8

(注) インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	15/11	15/12	16/01	16/02	16/03	16/04	16/05	2014	2015
	(%)							(%)	
先進国									
米国	5.0	5.0	4.9	4.9	5.0	5.0	4.7	6.2	5.3
日本	3.3	3.3	3.2	3.3	3.2	3.2	3.2	3.6	3.4
ユーロ圏	10.5	10.5	10.4	10.4	10.2	10.2		11.6	10.9
英国	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.0	5.0	6.3	5.4
豪州	5.8	5.8	6.0	5.8	5.7	5.7	5.7	6.1	6.1
カナダ	7.1	7.1	7.2	7.3	7.1	7.1	6.9	6.9	6.9
エマージングアジア									
中国		4.1			4.0			4.1	4.1
香港	3.3	3.3	3.3	3.3	3.4	3.4	3.4	3.2	3.3
インドネシア								5.8	6.0
韓国	3.5	3.5	3.5	4.1	3.8	3.7	3.7	3.5	3.6
マレーシア	3.2	3.4	3.4	3.4	3.5	3.5		2.9	3.2
フィリピン			5.8			6.1		6.8	6.3
シンガポール		1.9			1.9			2.0	1.9
台湾	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	4.0	4.0	4.0	3.8
タイ	0.9	0.7	0.9	0.9	1.0	1.0	1.2	0.8	0.9

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	15/12	16/01	16/02	16/03	16/04	16/05	16/06	2014	2015
	(前年比%)							(前年比%)	
先進国									
米国	0.7	1.4	1.0	0.9	1.1	1.0		1.6	0.1
日本	0.2	0.0	0.3	-0.1	-0.3	-0.4		2.7	0.8
ユーロ圏	0.2	0.3	-0.2	0.0	-0.2	-0.1	0.1	0.4	0.0
英国	0.2	0.3	0.3	0.5	0.3	0.3		1.5	0.0
豪州	1.7			1.3				2.5	1.5
カナダ	1.6	2.0	1.4	1.3	1.7	1.5		1.9	1.1
エマージングアジア									
中国	1.6	1.8	2.3	2.3	2.3	2.0		2.0	1.4
香港	2.4	2.5	3.0	2.9	2.7	2.6		4.4	3.0
インド	5.6	5.7	5.3	4.8	5.5	5.8		6.4	5.9
インドネシア	3.4	4.1	4.4	4.5	3.6	3.3		6.4	6.4
韓国	1.3	0.8	1.3	1.0	1.0	0.8	0.8	1.3	1.3
マレーシア	2.7	3.5	4.2	2.6	2.1	2.0		3.2	2.1
フィリピン	1.5	1.3	0.9	1.1	1.1	1.6		4.1	1.5
シンガポール	-0.6	-0.6	-0.8	-1.0	-0.5	-1.6		1.0	-0.5
台湾	0.1	0.8	2.4	2.0	1.9	1.2		1.2	-0.3
タイ	-0.9	-0.5	-0.5	-0.5	0.1	0.5		1.9	-0.9

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2014Q3	2014Q4	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2015Q4	2016Q1	2014	2015
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.1	-2.2	-2.3	-2.4	-2.5	-2.6	-2.6	-2.3	-2.6
日本	-0.1	0.5	1.8	2.4	2.9	3.3	3.6	0.8	3.3
ユーロ圏	2.3	2.4	2.7	2.9	3.1	3.2	3.1	2.5	3.2
英国	-5.0	-5.1	-4.8	-4.9	-4.9	-5.4	-5.8	-5.1	-5.2
豪州	-3.3	-2.9	-3.5	-5.3	-4.8	-5.5	-5.1	-3.0	-4.8
カナダ	-2.3	-2.3	-2.6	-2.8	-3.1	-3.2	-3.1	-2.3	-3.2
エマージングアジア									
中国	1.8	2.7	3.3	3.3	3.1	3.1	2.6	2.7	3.1
香港	1.5	1.3	1.3	2.6	3.1	3.1	3.8	1.3	3.1
インド	-1.2	-1.4	-1.3	-1.3	-1.1	-1.1	-1.1	-1.4	-1.1
インドネシア	-3.0	-3.1	-3.0	-2.5	-2.2	-2.1	-2.1	-3.1	-2.1
韓国	6.1	6.0	6.7	7.0	7.7	7.7	7.9	6.0	7.7
マレーシア	5.3	4.4	3.5	2.7	2.5	2.9	2.4	4.4	2.9
フィリピン	3.6	3.8	4.2	3.8	2.9	2.9	2.3	3.8	2.9
シンガポール	18.5	17.4	19.3	19.5	19.3	19.8	18.9	17.5	19.8
台湾	11.9	12.2	13.3	13.2	14.2	14.5	14.4	11.9	14.5
タイ	2.2	3.8	4.5	6.0	7.9	8.1	10.3	3.8	8.1

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位:bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	0.25 - 0.50	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2015/12/17	25	2016/6/16	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2016/6/16	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2016/6/2	現状維持
英国	バンク・レート	0.50	緩和: 2007/12/6	5.75	2009/3/5	-50	2016/6/16	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.75	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/5/3	-25	2016/6/7	現状維持
カナダ	翌日物金利	0.50	緩和: 2015/7/15	1.00	2015/1/22	-25	2016/5/25	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
香港	基準貸出金利	0.50	緩和: 2007/9/19	6.75	2008/12/17	-100	2011/12/14	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.50	緩和: 2015/1/15	8.00	2016/4/5	-25	2016/6/7	現状維持
インドネシア	翌日物金利	6.50	緩和: 2015/2/17	7.75	2016/6/16	-25	2016/6/16	-25bp
韓国	7日物レポ金利	1.25	緩和: 2012/7/12	3.00	2015/6/9	-25	2016/6/9	-25bp
マレーシア	翌日物金利	3.25	引き締め: 2010/3/4	2.00	2014/7/10	+25	2016/5/19	現状維持
フィリピン	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/5/16	3.00	2016/5/16	-100	2016/6/23	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2016/6/22	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.50	緩和: 2012/3/12	15.00	2014/3/17	-50	2014/12/23	現状維持

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行